

第81回企画展

5

我孫子の 都市鳥

都市の発展と鳥たちの移り変わり



7月14日(土)

▶ 11月25日(日) 我孫子市鳥の博物館

【開館時間】午前9時30分～午後4時30分【休館日】毎週月曜日(祝日の場合、翌平日)【入館料】一般 300円
大学・高校生 200円 70歳以上、中学生以下、障害者手帳等をお持ちの方(含付き添い1名)は無料 20名以上の
団体は入館料2割引【問い合わせ】千葉県我孫子市高野山234-3 ☎04-7185-2212



7月14日(土) ▶ 11月25日(日)

第81回企画展

我孫子の都市鳥

都市の発展と鳥たちの移り変わり



都市にくらす鳥たちがいる



食に、住に、都市の資源を有効活用



猛禽類も都市に侵入



ときには人との軋轢も

展示項目

1. 我孫子の自然と都市化
2. 鳥の目から見た市街地の環境
 - 2.1 鳥のくらしを支える都市の資源
 - 2.2 都市の資源の特性
 - 2.3 鳥の生息環境としての市街地のすみやすさとすみにくさ
3. 我孫子の都市鳥
 - 3.1 我孫子の都市鳥について
 - 3.2 昔から人と共にくらししてきた鳥たち
 - 3.3 都市へ進出して来た鳥たち
 - 3.4 都市にすむ鳥、すめない鳥
4. 人と共にくらす鳥たち
5. 都市鳥特設コーナー～電柱鳥類学～
6. 都市鳥トピックス

展示案内キャラクター

私たちが、つぶやき
ながら展示案内
します。



むくべえ

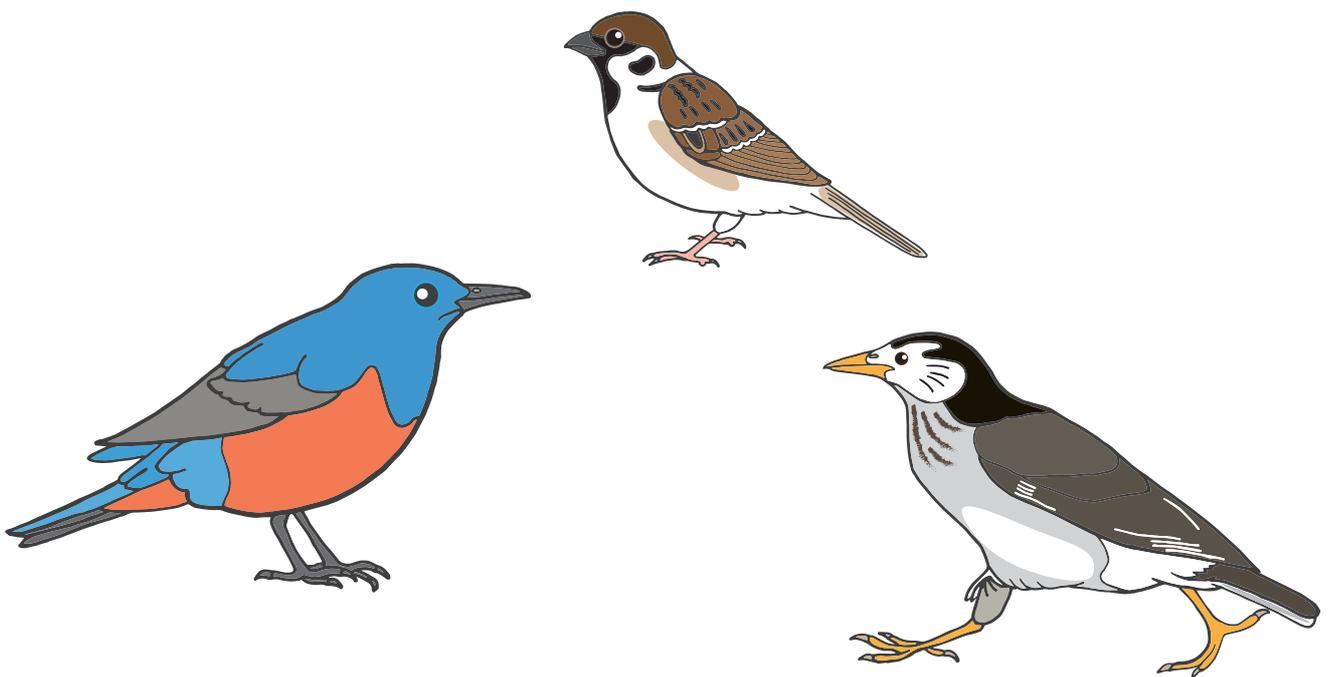


こすず



いそじろう

1. 我孫子の自然と都市化



手賀沼をのぞむ首都圏のベッドタウン

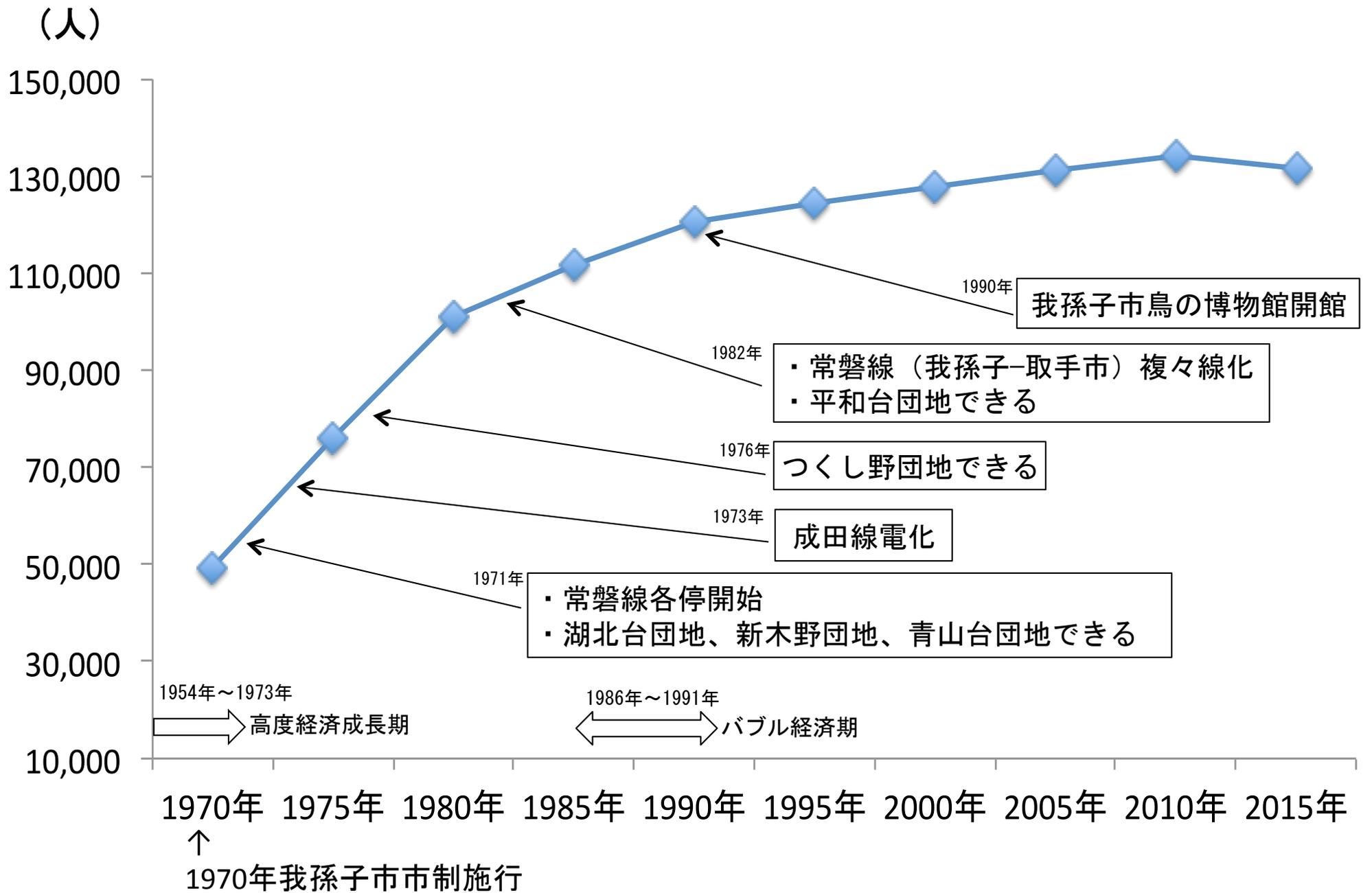
【水辺の自然が残る我孫子】

我孫子市は、南側に手賀沼、北側に利根川という自然の水辺環境が隣接し、利根川と手賀川沿いには農地が広がっています。また、南北に広がる台地上の市街地との境は斜面林となり、緑が多く残っています。年間を通じて約100種類の野鳥を観察することができ、自然豊かな街となっています。

【東京のベッドタウンとして発展】

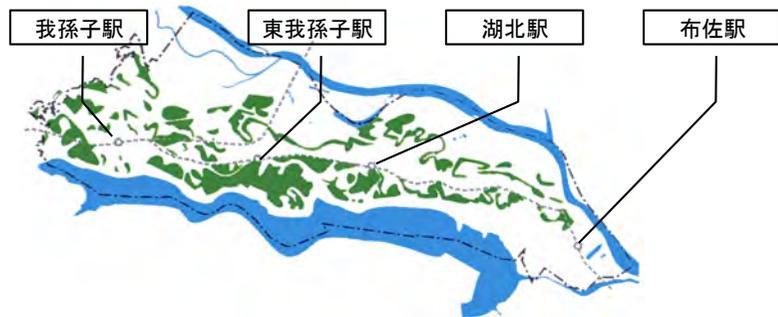
東京からおおむね30km圏内の我孫子市内にはJR常磐線とJR成田線が通過し6つの駅があります。1970年代以降は東京のベッドタウンとして宅地開発が進み、人口が急増しました。1980年代以降は、土地区画整理事業の進展や民間の大規模開発により、市街化が一層進行し、我孫子駅や天王台駅周辺には、大規模マンションやショッピングセンターが出現するなど、大きく様変わりしました。この頃から市街地を積極的に利用する鳥たち（都市鳥）の姿が目立つようになりました。





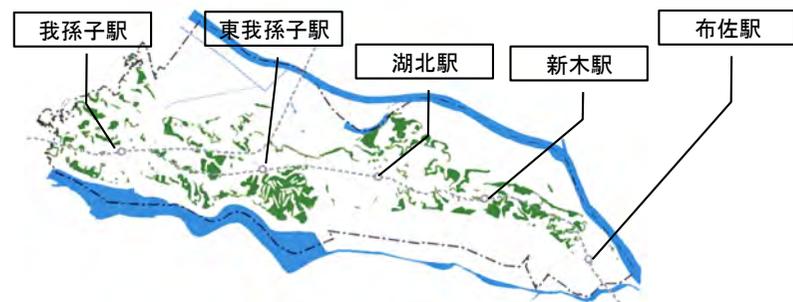
我孫子市の人口の変遷

(総務省統計局国勢調査より)



1952年(昭和27年)

現在よりも手賀沼の水面の面積が広く、鉄道沿いに樹林地が多く見られます。



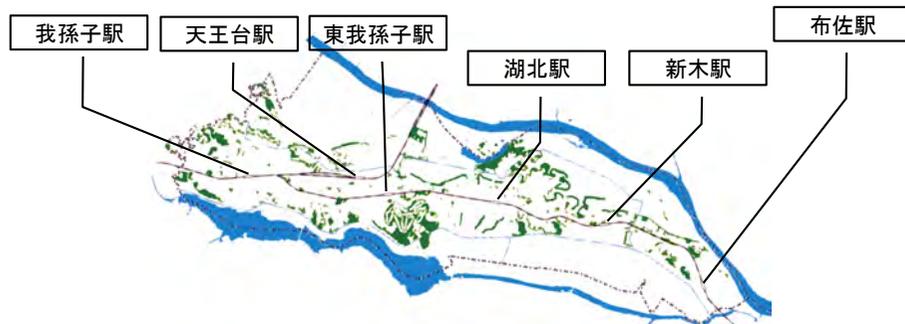
1970年(昭和45年)

手賀沼の干拓事業により、水面の面積が狭くなりました。我孫子駅、湖北駅周辺の市街地化が進み、1952年に比べ、樹林地が減少しています。



1999年(平成11年)

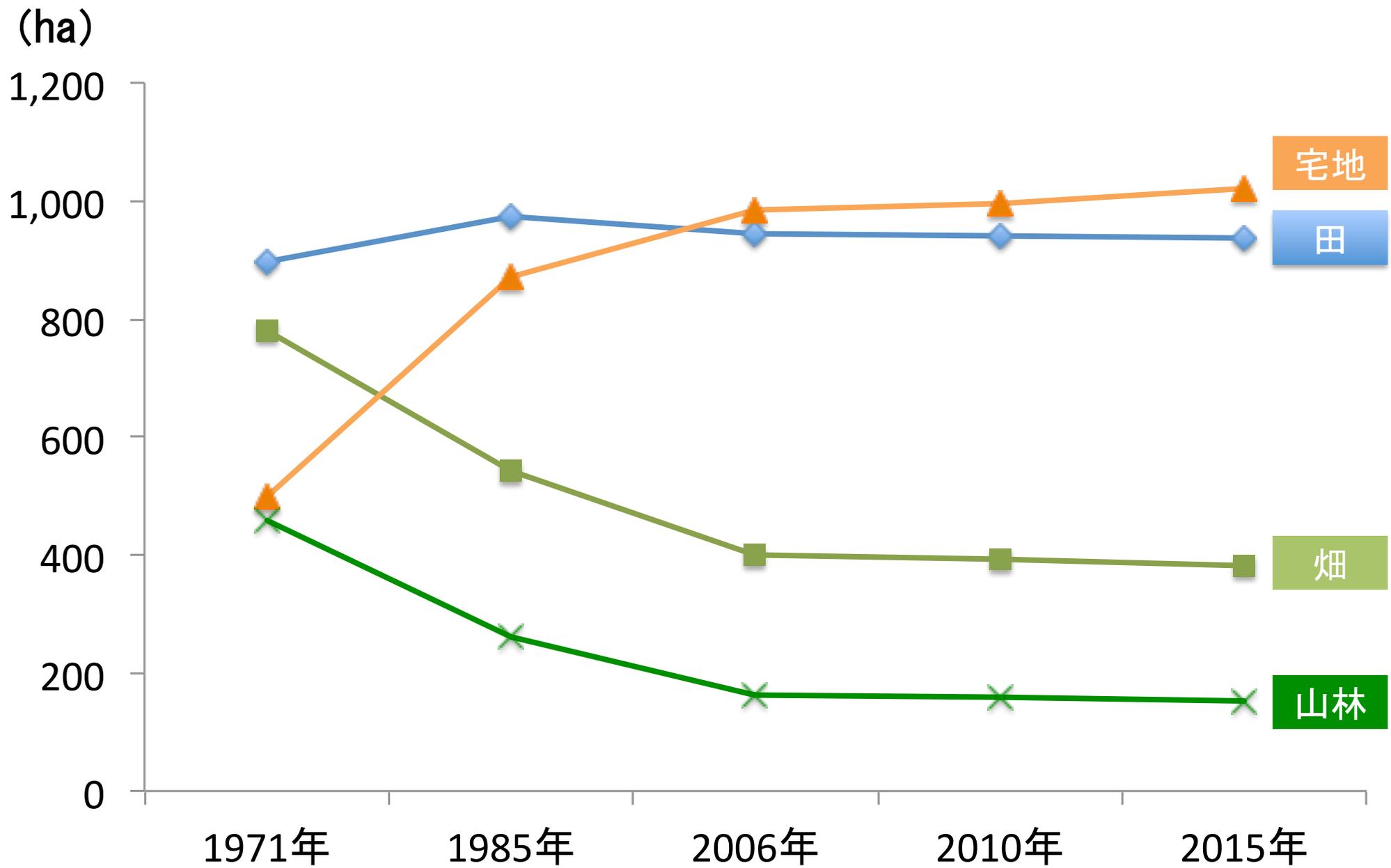
新木駅、布佐駅周辺の市街地化が進み、樹林地はさらに減少しています。



2008年(平成22年)

緑地保全の条例や施策が実施され、樹林地の減少に歯止めがかかりました。

我孫子市の樹林地面積の変遷 (我孫子市都市計画マスタープラン2012~2021より)



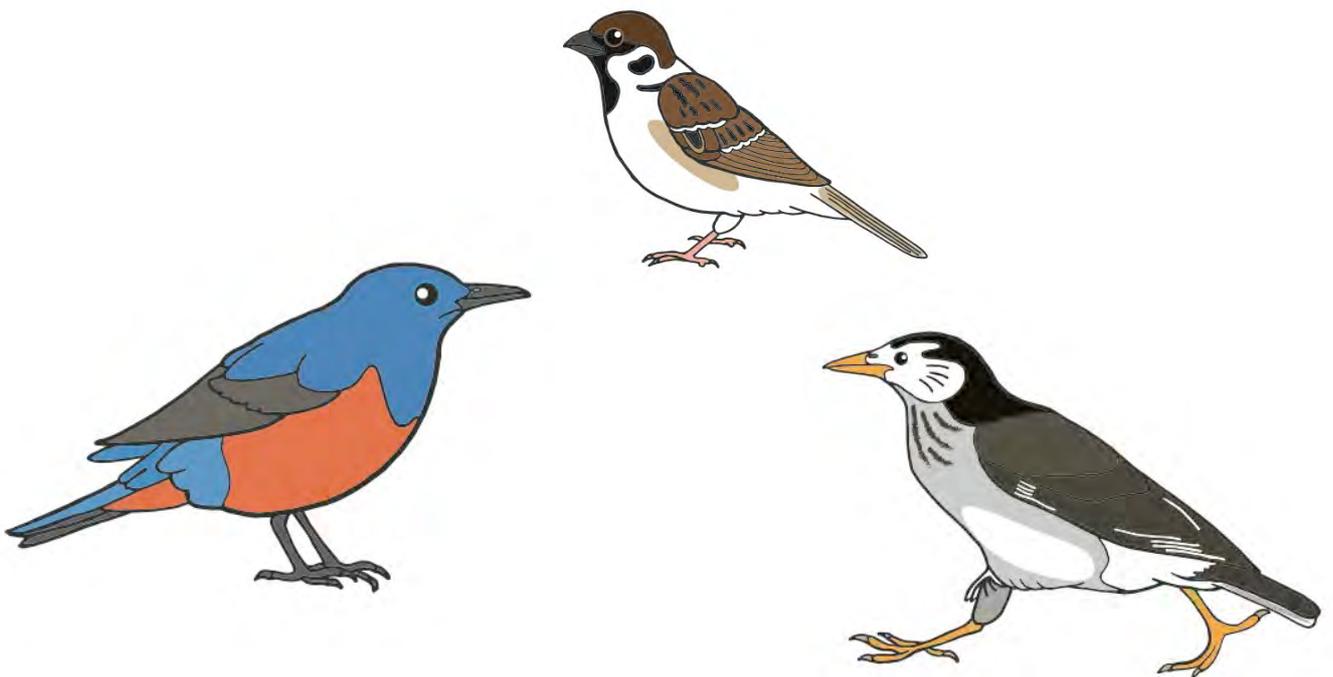
我孫子市の地目別土地利用面積の変遷

(我孫子市三次総合計画より)

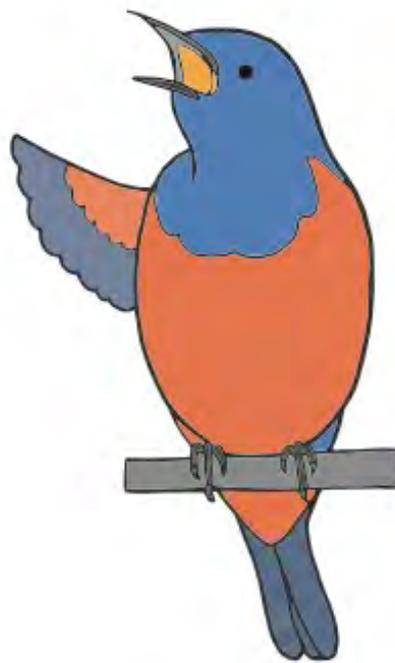


市街地として整備される我孫子駅前

2. 鳥の目から見た市街地の環境



2.1 鳥くらしを支える都市の環境



鳥のくらしを支える都市の資源

産業革命以降、コンクリートとアスファルトで覆われた大都市が出現すると、多くの鳥たちは姿を消しました。それでも都市の中に、食料・営巣場所・避難場所とねぐらなど、くらしに必要な資源を得ることができた鳥たちは、生き残ることができます。さらに、多くの鳥が去り、競合相手のいなくなった空間を占有できます。

都市鳥たちが、生き残るためにどんな資源を利用しているのか、確かめてみましょう。

【食料として】



人々が出する生ゴミ・公園やベランダの植物の果実・市街地に生息する昆虫やクモなどの節足動物・ヤモリや小鳥などが食料となっています。

【営巣場所として】



公園や庭に植栽された樹木、街路樹、建物の鋼材の隙間、看板塔や屋根の隙間などは営巣場所として使われます。

【ねぐらや避難所として】

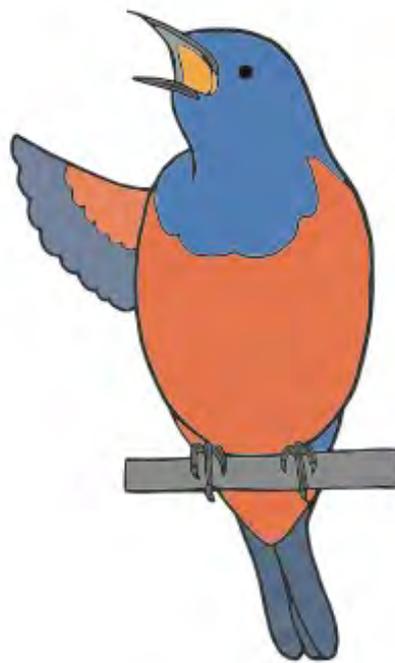


公園や庭に植栽された樹木、街路樹、看板の隙間、鉄骨の隙間などは安全なねぐらや避難場所になっています。

人が快適にくらせる場所は、鳥にとっ
ても安心できる場所であることが多い
んだ。



2.2 都市の資源の特徴



都市の資源の特徴

都市鳥の目から見ると、都市にはくらしに必要なさまざまな資源があることが分かりました。

しかし、人工的な環境の中にある資源は、本来の自然の中にある資源とは、異なる側面があります。

都市の中にある資源には、どんな特徴があるのでしょうか。

【高低差の大きい立体的な構造が多い】



高層ビルや電柱がつくり出す高低差のある環境は、樹上や崖地に代わる生活空間となります。

【緑地が島状に点在する】



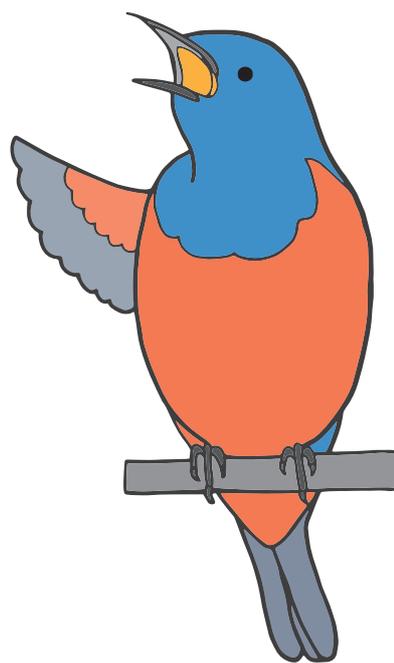
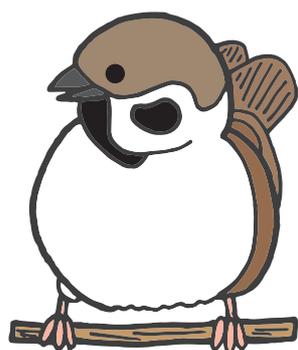
市街地の公園の緑は、点在した島状に分布しています。まとまった緑地を必要とする鳥もいますが、緑の島の間を飛んで効率よく巡回することで、まとまった緑地と同じように資源を得ることができる鳥もいます。

【季節の変化が少ない】



市街地では、生育・生息する生き物の種類が少ないため、季節による生物相の大きな変化はありません。また森林のような、落葉や紅葉による景観の劇的な変化もありません。

2.2 鳥の生息環境としての市街地の すみやすさとすみにくさ



鳥の生息環境としての 都市のすみやすさ、すみにくさ

都市鳥にとって、市街地は独り占めできるよい環境ですが、都市特有の不都合もあります。鳥の生息環境としての、市街地のすみやすさとすみにくさを比べてみましょう。

【すみやすい要素】

- ・ 天敵が少ない
- ・ 競争相手が少ない
- ・ 冬も暖かい
- ・ 雨風をしのぐことができる
構造物が多い
- ・ 夜も明るく活動可能



←夜、街灯の下
で餌を採る
ツバメ

撮影: 井田俊明



道路標識に
営巣した
スズメ →

撮影: 井田俊明

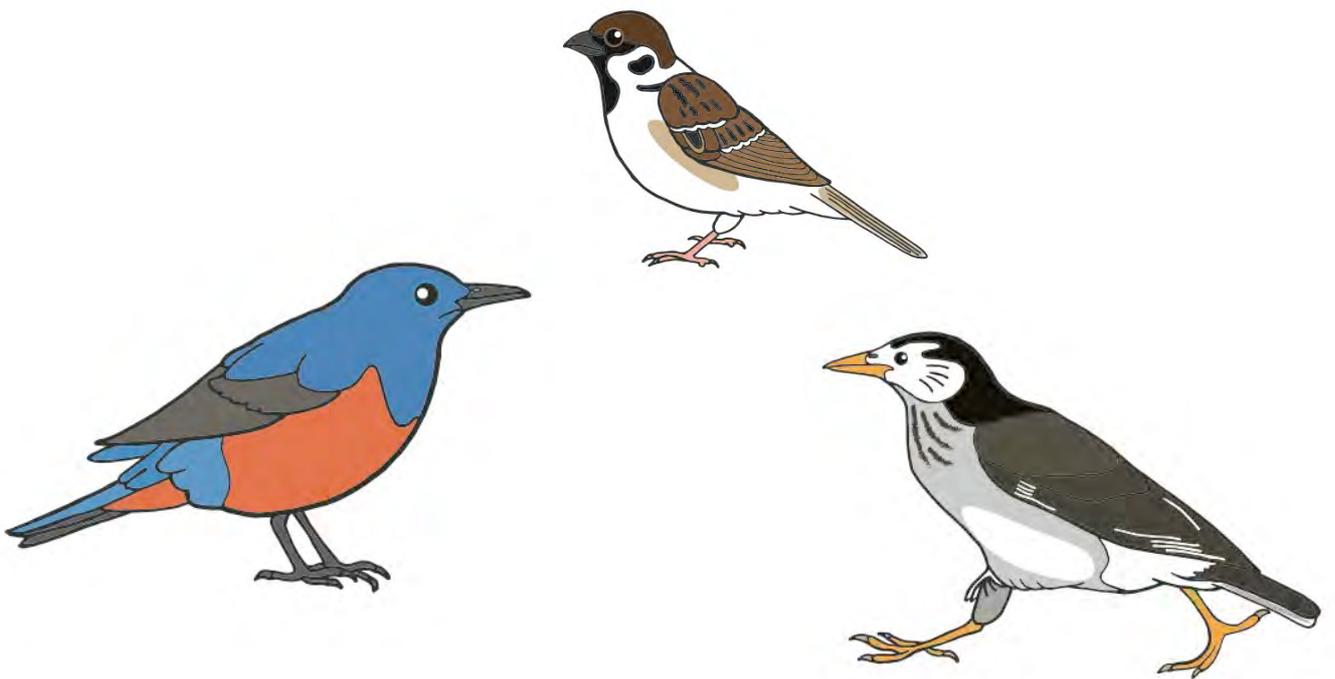
【すみにくい要素】

- ・ 広範囲にコンクリートとアス
ファルトで覆われ乾燥している
- ・ 水路は暗渠が多い
- ・ 交通量が多く交通事故の危険が
ある
- ・ 広いガラス張りの窓が多く衝突
の危険がある
- ・ 植生が単調で自然の餌資源が少
ない

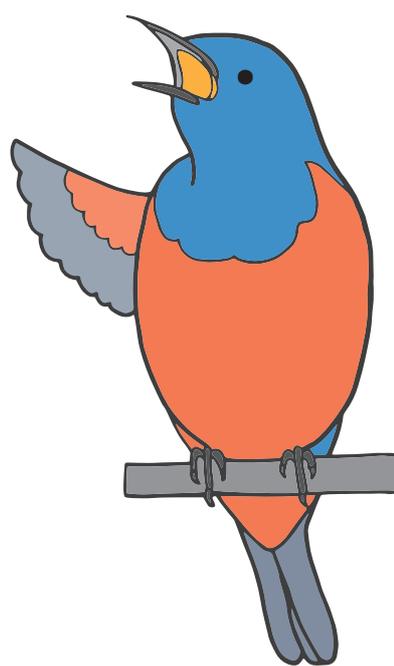
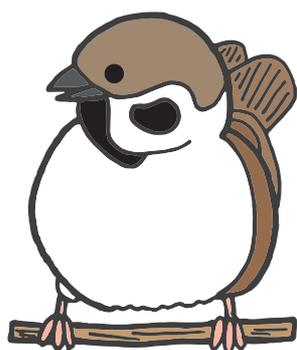


窓ガラスに衝突したキジバト
の衝突の痕と落鳥した個体

3. 我孫子の都市鳥



3.1 我孫子の都市鳥について



● 我孫子の都市鳥

我孫子市には6つの鉄道の駅があります。我孫子駅、天王台駅の周辺は、人口が集中し、市街地が広がる都市的環境となっています。一方、手賀沼や利根川周辺は、水田や畑が広がり人口密度の低い農村的環境です（下図参照）。

都市鳥とは「都市で食物資源を利用し、繁殖や越冬の場所を確保するなどして都市環境に適応した野生鳥類」（唐沢 2004）*のことですが、我孫子のように、都市と農村が混じり合った地域では、両方の環境を往来する鳥もいます。

本企画展では、都市に特有の人工的な環境や人の活動を利用して我孫子市内で子育てする鳥（繁殖鳥）を選び、そのくらしと都市鳥らしい習性をパネルと標本で紹介しました。

身近な鳥たちが、人工的な環境や人の活動をたくみに利用してくらす姿を思い浮かべることができるでしょう。

* 唐沢孝一. 2004. 都市鳥. 山岸哲・森岡弘之・樋口広芳（監）. 鳥類学辞典. 昭和堂

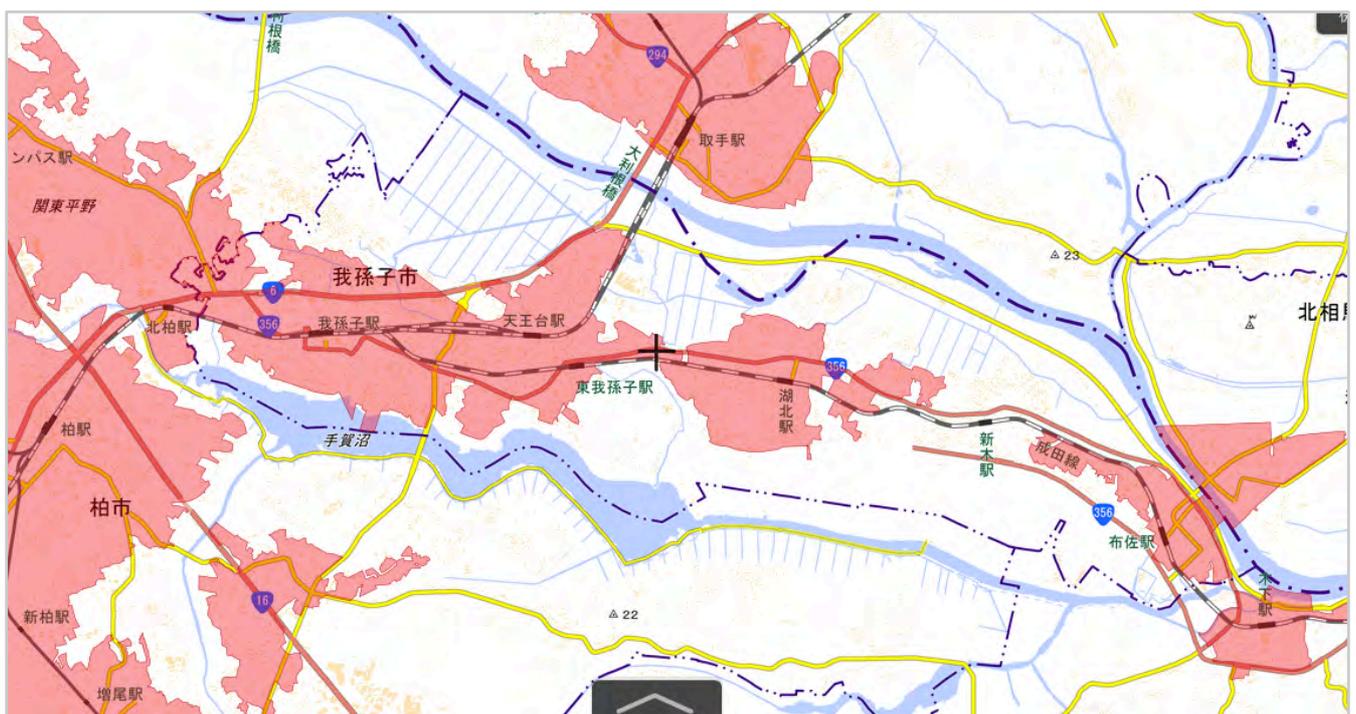


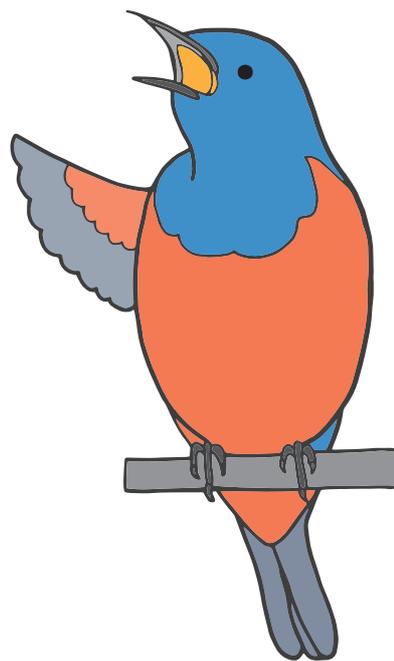
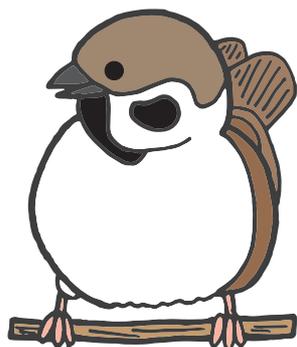
図. 我孫子市の人口集中地区（赤い部分が人口4000人/km²以上が連続する地域）

国土交通省国土地理院のホームページより（2018年5月検索）

空から眺めると、我孫子って田んぼに
囲まれた都市なんだ。



3.2 昔から人と共にくらしてきた 鳥たち



ツバメ

—愛され度No.1の鳥—

【我孫子の市街地での暮らし】

我孫子では、毎年3月下旬に姿を現す夏鳥です。人家の玄関前、商店街の軒先、駐車場の入り口など、人の気配があり、屋根で覆われた壁面に巣をつくります。

1988年に行われた我孫子市全域のツバメの巣調査では、国道6号添い・356号沿い・つくし野の商店街に多くの巣が見つかったのに対し、20年後の2017年、鳥の博物館友の会によるツバメの巣調査では、湖北台南部・南新木・布佐平和台など住宅が建設され人通りが多くなった地域に、ツバメの巣の多いことが分かりました。（我孫子市のツバメ調査については、中央のパネル展示「都市鳥トピックス」で詳しく紹介しています。）

【安全な軒先で子育て】

泥と唾液をこね合わせて造った巣は、雨にぬれると壊れてしまうので、ツバメは決まって屋根のある壁面に巣をつくります。この条件を満たす場所としては洞穴も考えられますが、これまでツバメが人工構造物以外に巣を造った例はほとんど知られていません。人が家を作り始める以前はどこに巣をつくっていたのか、詳しいことは分かっていません。

【人に寄り添って安心=ツバメ式子育て】

ツバメは、稲などの農作物を食害する昆虫を食べるため、昔から益鳥として大事にされてきました。またツバメが軒先に巣をつくと商売が繁盛すると言われ、縁起のよい鳥として好意的に受け入れられていました。

ツバメにとって市街地を往来する人は、天敵を追い払ってくれるありがたい存在です。いつも人の気配がある場所は、天敵のカラスやヘビ、ネコなどが近づかない安心して子育てできる場所です。

【変化するツバメと人との関係】

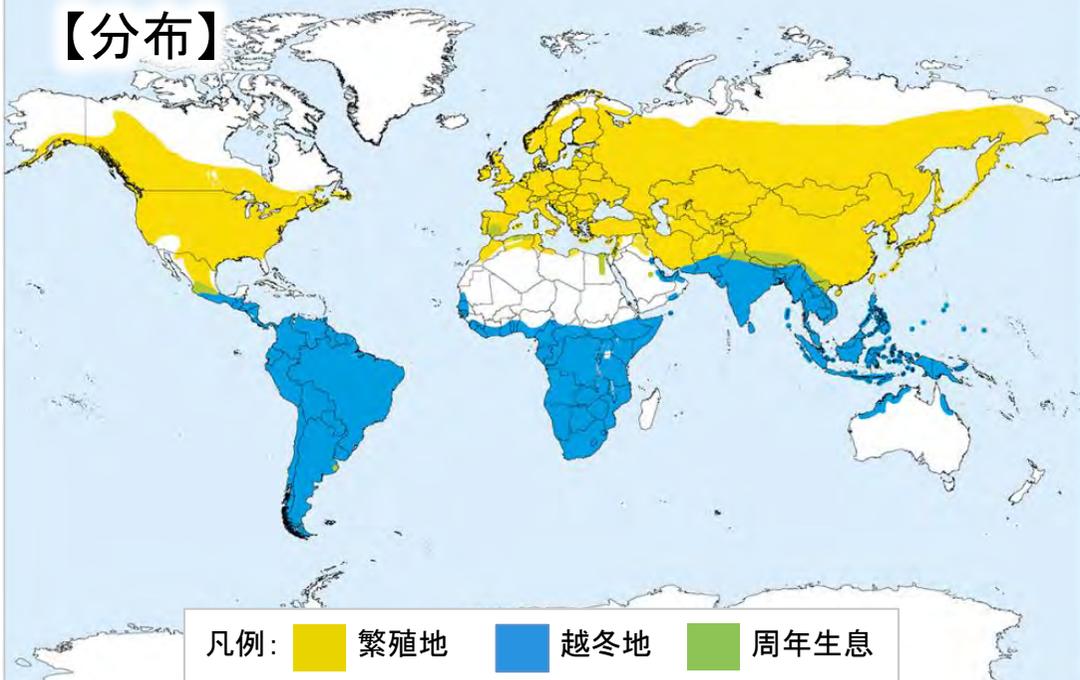
最近、ツバメが軒先に巣をつくと、糞や食べ残しの昆虫が床を汚すことを嫌って、巣造りさせないようにする人が増えてきました。また、汚れが付きにくいコーティング処理された新建材の壁面は、ツバメが巣材の泥をしっかりと貼付けることができません。さらに市街地の面積が広がると、巣材の泥や餌の飛翔性昆虫を得るために、田んぼや草地まで長い距離飛行しなければなりません。

これまではツバメの子育てに適していた市街地の環境も、時代とともに変化していきます。

ツバメ Barn Swallow



【分布】



【分類】 スズメ目ツバメ科

【学名】 *Hirundo rustica*

【食べ物】 飛翔性昆虫（ハチ、アブ、トンボなど）

【営巣場所／形／巣材】 壁面／お椀型／泥と植物の繊維

【産卵期】 4～7月

【配偶形式】 一夫一妻

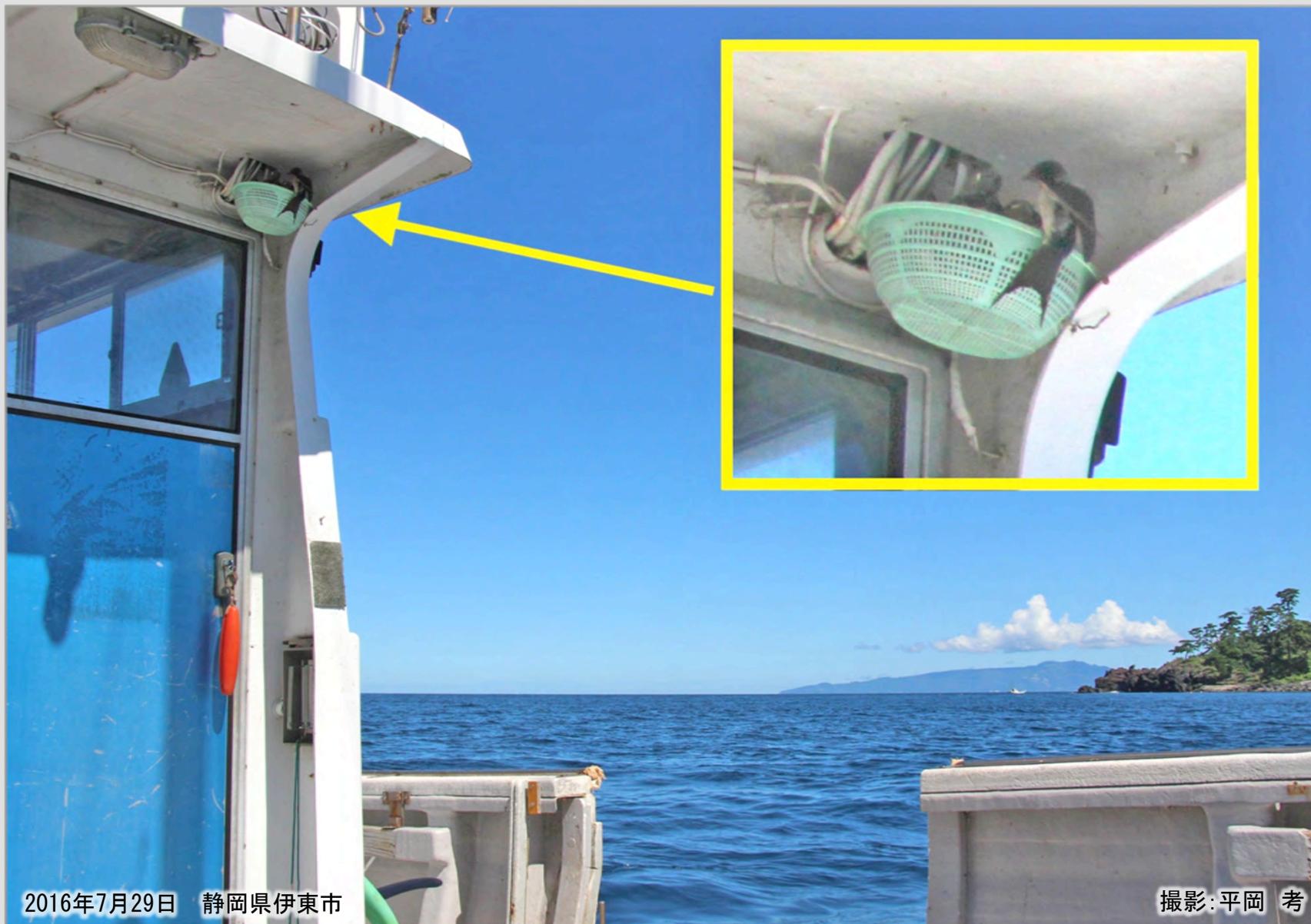
【一腹卵数】 3～7卵

【抱卵日数】 13～14日

【育雛日数】 17～20日

【抱卵の分担】 ♂ < ♀

【我孫子市内で見られる季節】 3月～9月（日本で繁殖するツバメ（*H. r. gutturalis*）は、フィリピン、インドネシアなど熱帯で越冬）



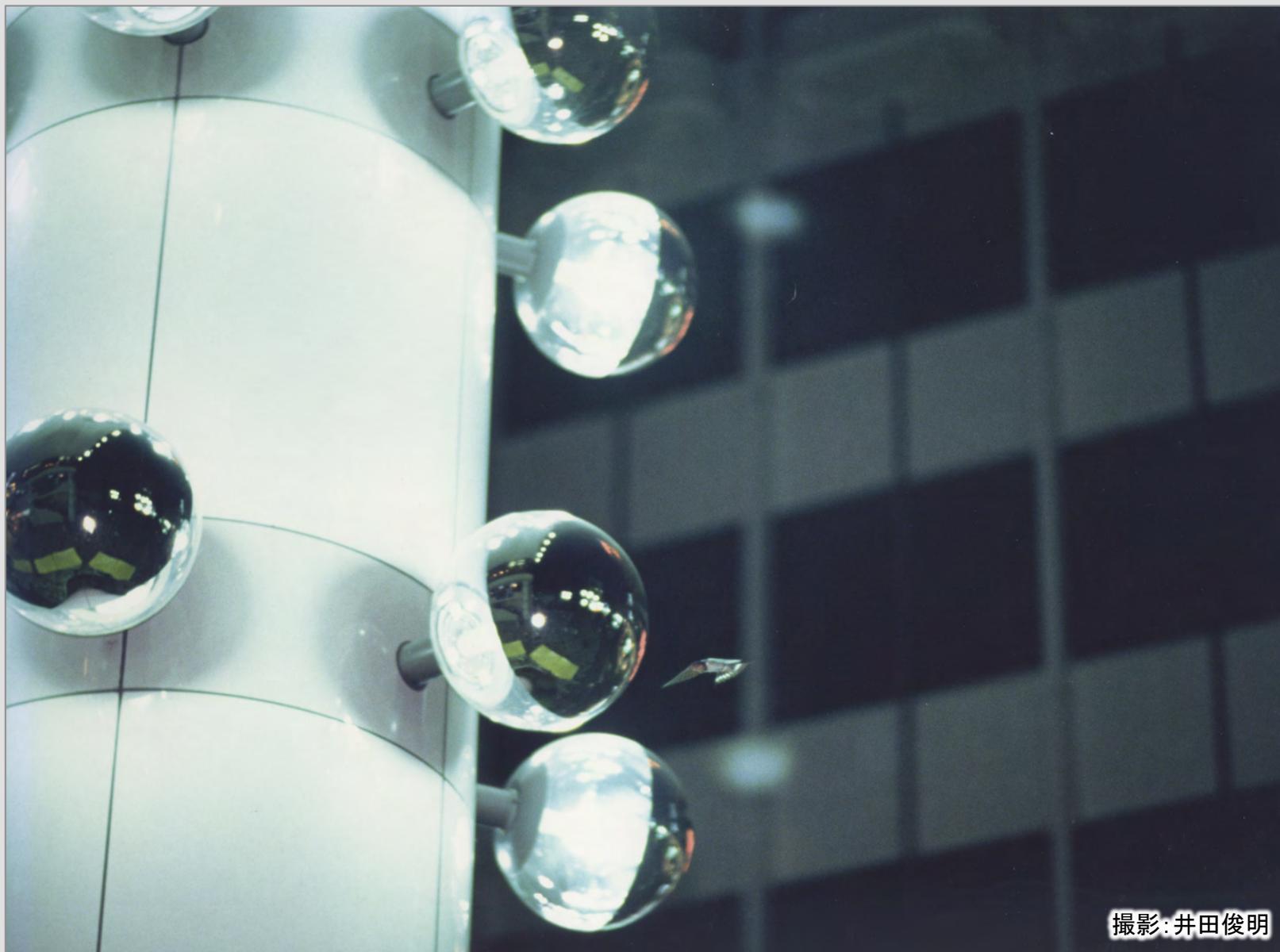
漁船に営巣するツバメ

船などの移動する乗り物にツバメが営巣する例が、まれに確認されています。



校舎の中につくられたツバメの巣

ツバメの巣は、雨をしのげる人工構造物につくられます。



撮影: 井田俊明

街灯のまわりで夜間採餌するツバメ

都市では、街灯のまわりで、夜間に餌をとるツバメが見られるようになりました。

スズメ

—人と共にくらししてきた鳥—

【我孫子の市街地でのくらし】

人家のあるところに必ず見られます。瓦屋根の隙間や鉄骨の隙間、電柱の腕金や変圧器の隙間などが営巣場所としてよく利用されます。

4月から子育てが始まり、巣立ちビナに、昆虫やクモを運んで与える親鳥の姿を見かけるようになります。自立した幼鳥は、大群となってヨシ原や藪の中でねぐらをとるようになります。

稲や草の種をよく食べますが、公園のベンチの近くに落ちているお菓子のかけらや餌台の米やパン屑も、目ざとく見つけて食べに来ます。

【人のくらしに寄り添うスズメ】

スズメは、日本人の誰もが知っている身近な鳥です。人家の近くにすみ、秋になると稲穂に群れるスズメを見ると、稲作とともに大陸から日本にやってきたという説があることも理解できます。廃村になり、人が去った集落からは、スズメもいなくなります。また、都心のオフィス街のように、昼間はたくさんの人でにぎわっていても、夜になると人がいなくなるような場所もスズメはすみつきません。

人のくらす環境は、時代とともに変化してきましたが、スズメは変わらず人の近くにすんでいます。

【時代とともに変わる人との距離感】

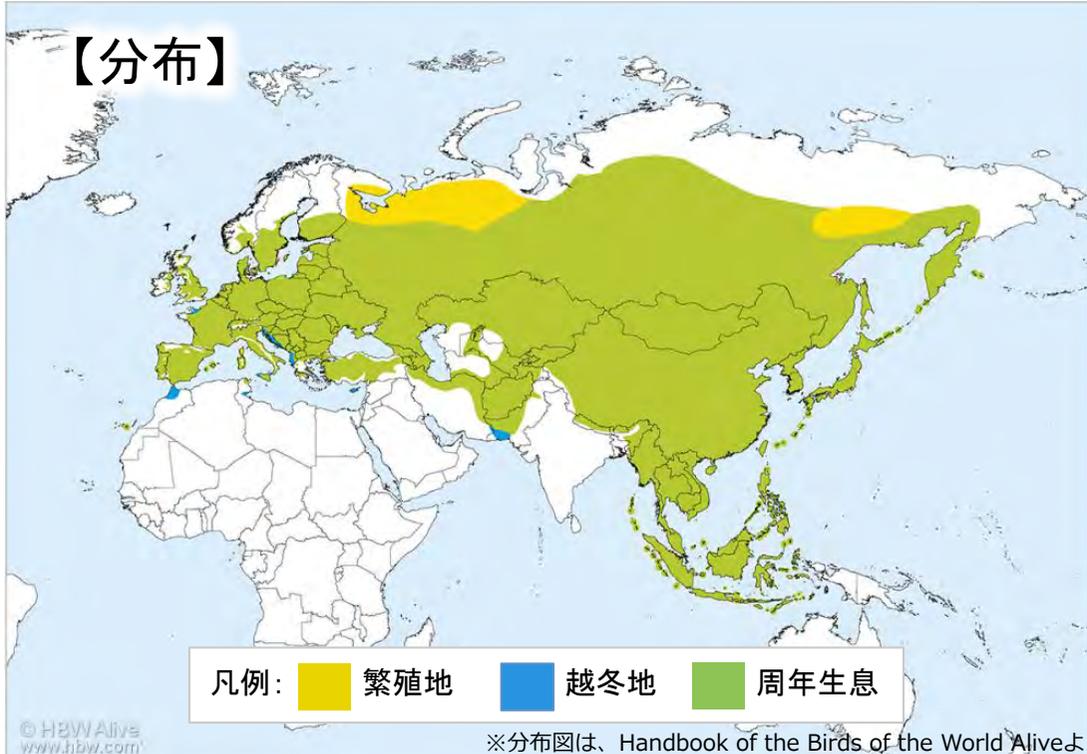
身近なスズメですが、意外なことに人とは一定の距離を保っています。庭先に米をまくとすぐ近寄ってきますが、元来けっして人の手からは食べません。人の怖さも知っていて、これが長い間身近な鳥であり続けることができた性質かも知れません。

しかし、最近、人の手から餌を食べる手乗りスズメが各地の都市で観察されています。都市では、人がスズメを追い出すことはほとんど無く、スズメも人を恐れなくなったためと考えられます。人と鳥との距離は、人の接し方によって、変化していくことが分かります。

スズメ Eurasian Tree Sparrow



【分布】



【分類】 スズメ目スズメ科

【学名】 *Passer montanus*

【食べ物】 種子食・昆虫食（種子、昆虫、クモ）

【営巣場所／形／巣材】 樹洞や人工建造物の隙間／巣材編み込みドーム型／枯れ草など

【産卵期】 2～9月

【配偶形式】 一夫一妻

【一腹卵数】 4～8卵

【抱卵日数】 11～12日

【育雛日数】 13～14日

【抱卵の分担】 ♂=♀

【我孫子市内で見られる季節】 1年中

【その他】 北米とオーストラリアの一部の地域では移入され定着している。



撮影:井田俊明

道路標識のパイプの中で子育てするスズメ

都市の中には、スズメが営巣場所として選ぶ人工構造物がたくさん見つかります。



サクラの花の蜜をなめとるスズメ

江戸時代から知られる習性ですが、全国どこでも見られるようになったのは1980年以降のことです。



1990年代から見られるようになった手乗りのスズメ

スズメは、人と一定の距離を保ってくらしてきましたが、1990年代から人の手に乗るスズメが現れました。

私たちスズメは、昔から人のくらしに寄り添って生きてきたんだけど、高層ビルやコンクリートに覆われた近代都市の発展にはついていけないんだ。巣作りの場所や餌のとれる場所を探すのが難しくって、全国的には数が減っているという調査結果もあるんだ。



ドバト

—飼い鳥が野生化—

【我孫子の市街地での暮らし】

マンションのベランダやビルの屋上など、コンクリートで囲まれた高所に、小枝を運び営巣します。広いスペースがあれば、集団でも繁殖します。繁殖期は長く、秋や冬にも子育てすることがあります。

公園で人の与える餌やこぼれた食べ物に集まります。人をおそれず、餌があれば足元まで近づきます。また、水辺の浅瀬や田んぼで集団で餌を食べる姿も見かけます。

【人がつくった鳥】

ドバトの名前の由来は堂鳩からと言われ、お寺の御堂のまわりに集まる鳩であることから付けた名前と考えられています。ドバトは、中東からヨーロッパにかけて生息するカワラバトを人が飼いならして改良したもので、紀元前3000年の古代エジプトですでに飼育記録があります。食料や愛玩用、レース用など、カワラバトの潜在能力を最大限に引き出し、品種改良がさかんに行われました。これが再び野生化したものがドバトです。日本国内への移入の経緯は明らかではありませんが、平安時代にすでに堂鳩として記録されています。

もともと家禽として人に飼い慣らされたハトなので、人への警戒心が薄く、人の近くでくらしします。

【強い繁殖力】

ハトの仲間は、そ嚢（消化管の一部）の壁面から分泌されるピジョンミルクでヒナを育てます。したがって、季節によって変動する餌条件に左右されず、年中子育て出来るので、強い繁殖力を持っています。

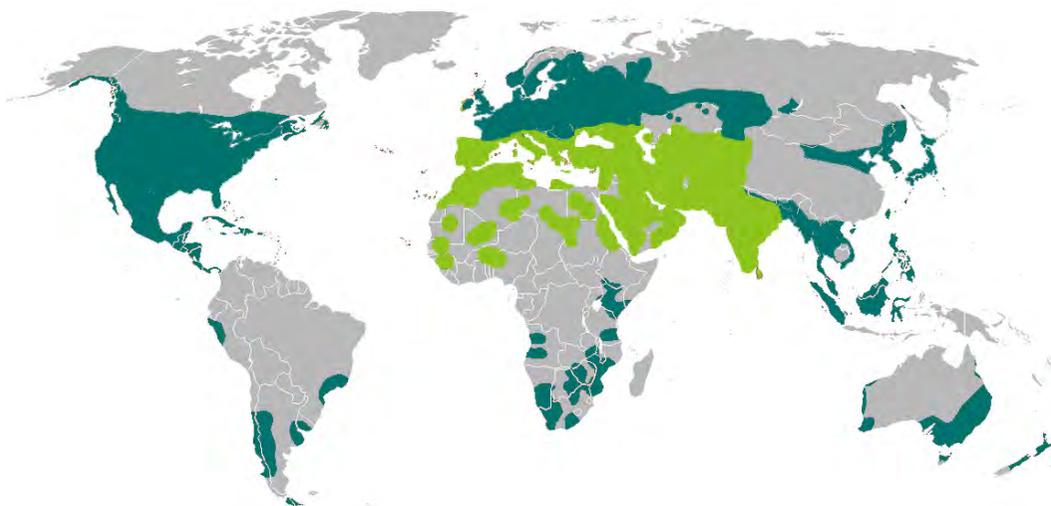
【生息地によく似た市街地の環境】

ドバトの原種のカワラバトは、乾燥地域の崖の岩棚で繁殖し、開けた草地で餌を採ります。市街地には、崖地に代わるビルと、開けた草地に代わる公園の芝生や畑が整っています。

ドバト Rock Dove



【分布】



凡例: ■ 原種カワラバトの分布域 ■ 移入による人為的分布域

【分類】 ハト目ハト科

【学名】 *Columba livia*

【食べ物】 種子食（種子、昆虫の幼虫、カタツムリなど）

【営巣場所／形／巣材】 テラスや崖地の棚
／皿形／枯れ枝

【産卵期】 2～9月

【配偶形式】 一夫一妻

【一腹卵数】 2卵

【抱卵日数】 16日

【育雛日数】 28～35日

【抱卵の分担】 ♂=♀（夜間は♀）

【我孫子市内で見られる季節】 1年中

【その他】 ドバトはカワラバトを家禽化したものが、再び野生化したもの。



人を恐れず足元で餌を食べるドバトの群れ

ドバトは、カワラバトを原種とする家禽が野生化したもので、人をあまり恐れません。



屋上につくられたドバトの巣と卵

看板塔や空調の室外機の置かれたビルの屋上は、崖地など本来の営巣場所に似た構造のため、よく利用されます。



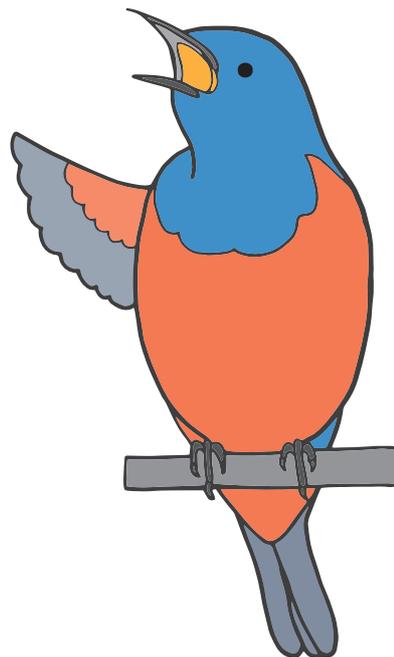
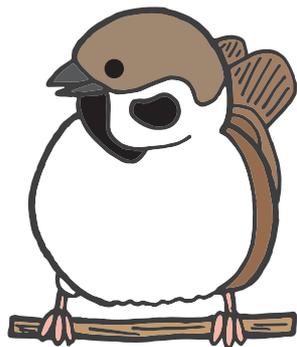
田んぼで落ち穂を食べるドバトの群れ

市街地にすむドバトが、付近の水田で群れになって落ち穂を食べることもあります。

人間に好かれたり、嫌われたり、ドバトに身になって考えれば、どっちなのかはっきりして欲しいだろうね。



3.3 都市に進出して来た鳥たち



キジバト -かつての山鳩-

【我孫子の市街地でのくらし】

街路樹や藤棚、民家の庭木など、市内の各所で営巣しています。親鳥は、そのう（消化管の一部）から分泌されるピジョンミルクでヒナを育てるため、季節による餌の変化に大きく影響を受けないため、長い期間繁殖できます。我孫子市内では10月の営巣記録もあります。

樹上の巣は、ヒナをねらうカラスやネコに襲われることが多いため、これらの天敵の近づきにくい、人通りの多い場所にある建物の鉄骨の棚の上などに営巣する例が最近増えてきました。

人をあまり恐れず、地上で餌を採るキジバトの近くを人が通っても、そのまま採餌し続けることもしばしばあります。

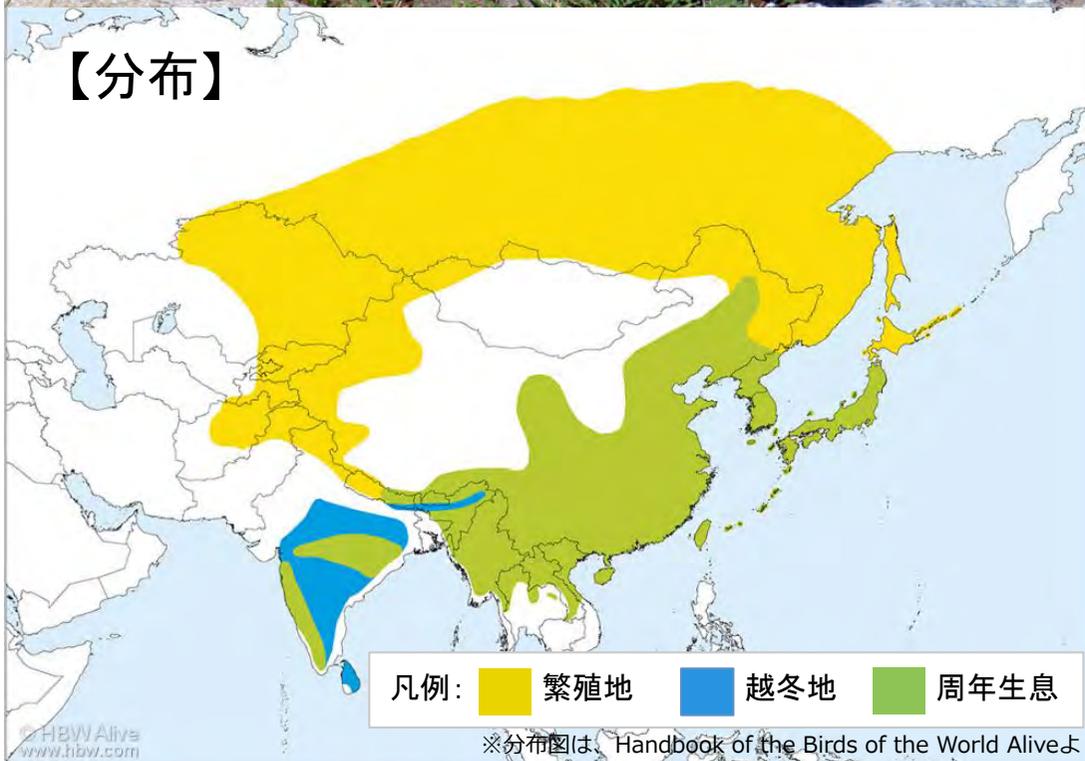
【山の鳥から里の鳥へ】

キジバトは、かつて山鳩と呼ばれ、山地の森でくらす鳥でした。1960年代頃から東京都内の市街地でも見られるようになり、1970年代に入ると、都心の繁華街でも繁殖するようになりました。1977年以降、東京、神奈川、埼玉など首都圏各地で、駅のホームや倉庫など人工構造物への営巣が見られるようになりました。

キジバト Oriental Turtle Dove



【分布】



※分布図は、Handbook of the Birds of the World Aliveより引用

【分類】 ハト目ハト科

【学名】 *Streptopelia orientalis*

【食べ物】 植物食（昆虫、果実、種子など）

【営巣場所／形／巣材】 樹上／皿型／枯れ枝

【産卵期】 3～11月

【配偶形式】 一夫一妻

【一腹卵数】 2卵

【抱卵日数】 15～16日

【育雛日数】 15～17日

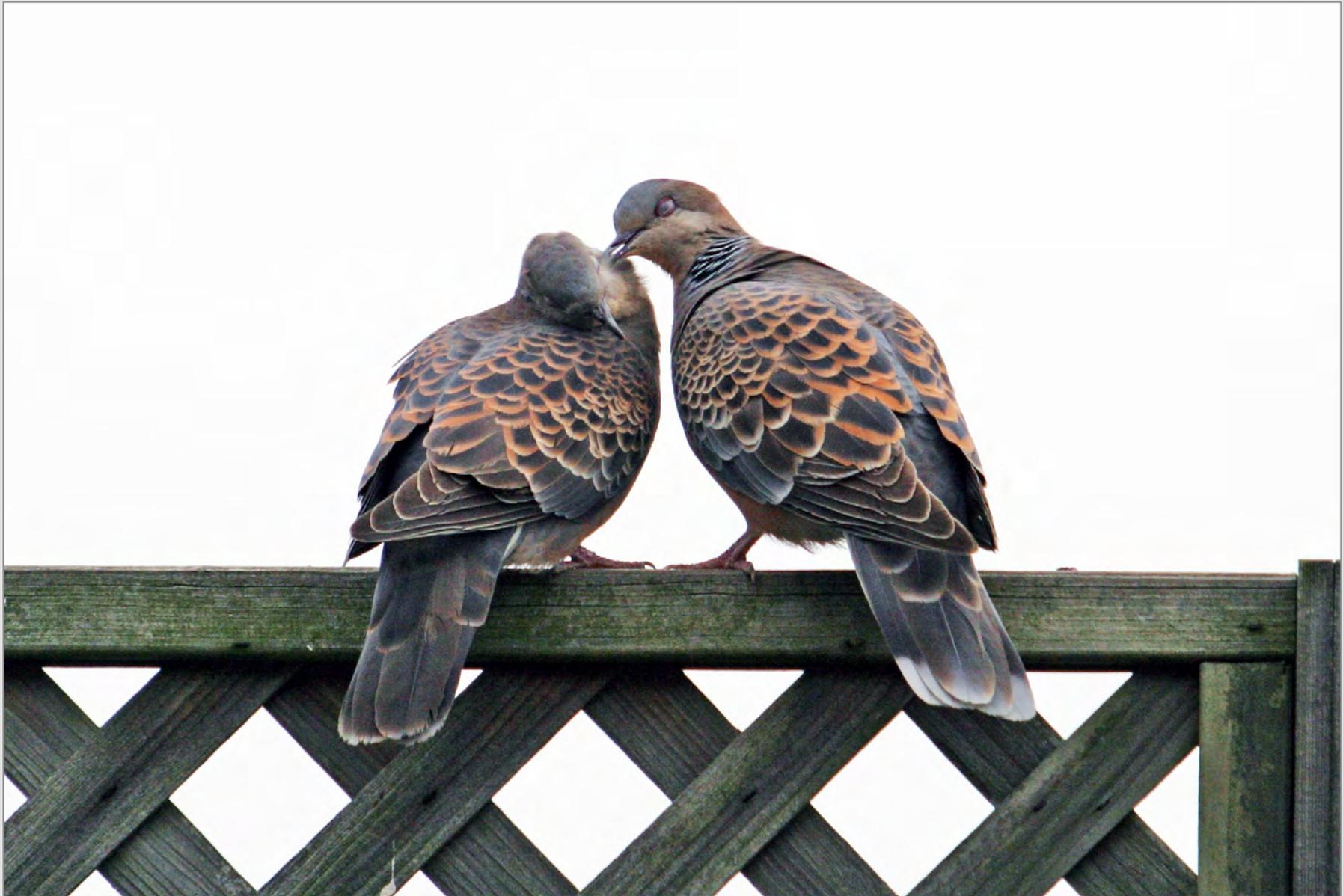
【抱卵の分担】 ♂=♀

【我孫子市内で見られる季節】 1年中



植栽したピラカンサに営巣したキジバト

窓際の植え込みは、人の気配があり、天敵のカラスが近づきにくいいため、営巣場所としてよく選ばれます。



ベランダで求愛するキジバト

さまざまな都市空間を上手に選び、活動の場として利用しています。



鉄骨階段のはりの上に営巣したキジバト

人が頻繁に上り下りする階段には、ヒナの天敵のカラス類も簡単には近づきません。

ずいぶん簡単な巣だけど、危険がせまれば
すぐ引っ越しできて、考えてみれば便利な
巣だね。



ハシブトガラス

ー森から都市へー

【我孫子の市街地での暮らし】

我孫子市内には、ハシブトガラスとハシボソガラスの2種類がすみつき子育てしています。ハシブトガラスの方が、高い場所でよく鳴くので、声だけから判断するとハシブトガラスの方が目立ちます。

市街地では、人が捨てた生ゴミをあさったり、繁殖期にはツバメやスズメ、ムクドリ、ヒヨドリ、キジバトなど他の鳥の巣立ち間際のヒナをよくねらいます。猛禽類のツミの巣を集団で襲うこともあります。

住宅地の街路樹の中に営巣することもあり、巣を防衛する親鳥が下を横切る歩行者を威嚇することもあります。

【都会のカラス】

よくハシブトガラスは都会のカラス、ハシボソガラスは田園のカラスと言われます。高層ビルが立ち並ぶ、コンクリートとアスファルトで覆われた都心部で見られるカラスは、ほぼハシブトガラスです。一方、市街地でも、水田や畑に近い場所では、ハシボソガラスも見られます。

水田と畑が市全域の約30%の面積を占める我孫子市では、ハシブトガラスとハシボソガラスが半分ずつの割合で見られます。

【森から都市へ】

田んぼや畑など開けた地上を歩き回って餌をとることが多いハシボソガラスに対して、ハシブトガラスは、本来森林性の鳥で、高い木の上から地上を観察し、林床に横たわる動物の死体などを見つけて食べる習性があります。

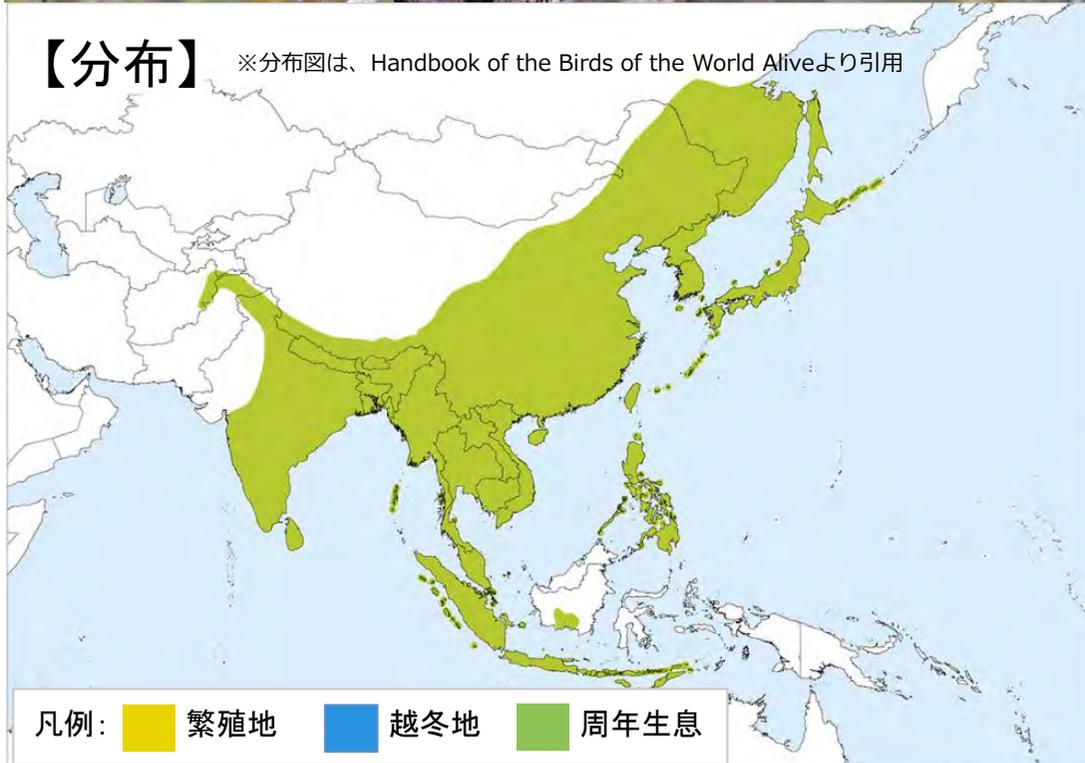
ハシブトガラスにとって、市街地の電柱や高いビルは、食料を見渡すための森林の高木に代わる見張り台となり、また定期的に回収所に集まる生ゴミは、林内の動物の死体に代わる食料となります。都市には、ハシブトガラスが森林での暮らしをそのまま持ち込むことができる環境が整っています。

ハシブトガラス Large-billed Crow



【分布】

※分布図は、Handbook of the Birds of the World Aliveより引用



【分類】 スズメ目カラス科

【学名】 *Corvus macrorhynchos*

【食べ物】 雑食（昆虫、魚、両生類、は虫類、ほ乳類、鳥類、果実、種子など）

【営巣場所／形／巣材】 樹上／お椀型
／小枝や獣毛など

【産卵期】 3～6月

【配偶形式】 一夫一妻

【一腹卵数】 3～6卵

【抱卵日数】 20～22日

【育雛日数】 34～36日

【抱卵の分担】 ♀のみ

【我孫子市内で見られる季節】 1年中



ゴミ収集場所に集まったハシブトガラス

住宅地のゴミ収集場所は、カラスにとっては餌となる生ゴミが定期的に得られる場所となっています。



樹上から飛び降りて餌をついばむハシブトガラス

見晴らしのきく樹上で餌を見つけたハシブトガラスは、地上に降りてきて餌を食べます。



樹上から地上の様子を観察するハシブトガラス

本来、森林性のハシブトガラスは、樹上などの高みから地上を見回して餌を探します。

シジュウカラ — 巣穴さがしの名人 —

【我孫子の市街地でのくらし】

排水パイプの横穴、工事現場の天井に穴の空いた三角コーン・塀を固定するために垂直に打ち込まれたパイプの縦穴など、市街地のさまざまな隙間に営巣するほか、公園や庭先の植木に巣箱を架けるとよく利用します。子育ての時期には、イモ虫やクモを捕らえてヒナに与える姿をよく見かけます。

冬は、餌台にもよく飛来し、ヒマワリの種やピーナッツ・脂身などを好んで食べます。

【シジュウカラの空白地帯だった我孫子】

我孫子で普通に見られる鳥ですが、1970年代前半までは、東京都内の隅田川以東の下町や我孫子を含む千葉県北西部はシジュウカラの繁殖空白地帯でした。我孫子野鳥を守る会の記録によると、1976年以降、毎年見られるようになりました。空白地帯の地域は、かつて東京湾に注ぐ河川による沖積層の低湿地であり、シジュウカラの好む広葉樹林がありませんでした。近年市街地につくられた緑地が充実してきたことが、空白地帯が無くなった理由と考えられています。

【市街地進出への素質】

人をあまり恐れない好奇心旺盛な習性と、樹洞営巣性であり巣箱や人工構造物の隙間を利用できることから、市街地の環境に順応したものと思われれます。

【市街地生活の苦勞】

樹洞に営巣する鳥は、自分で巣を造る鳥とちがい、適当な巣穴を探し出さなければいけません。シジュウカラは、同じく市街地にすむ樹洞営巣性のスズメと営巣場所が競合します。体の少し大きなスズメの方が優位なため、シジュウカラは、スズメを避けて営巣することで、市街地でくらし続けることができているようです。

シジュウカラ Japanese Tit



【分類】 スズメ目シジュウカラ科

【学名】 *Parus minor*

【食べ物】 昆虫食（昆虫、果実、種子）

【営巣場所／形／巣材】 樹洞・人工構造物／巣材敷き詰め／コケや獣毛

【産卵期】 4～7月

【配偶形式】 一夫一妻

【一腹卵数】 8～10卵

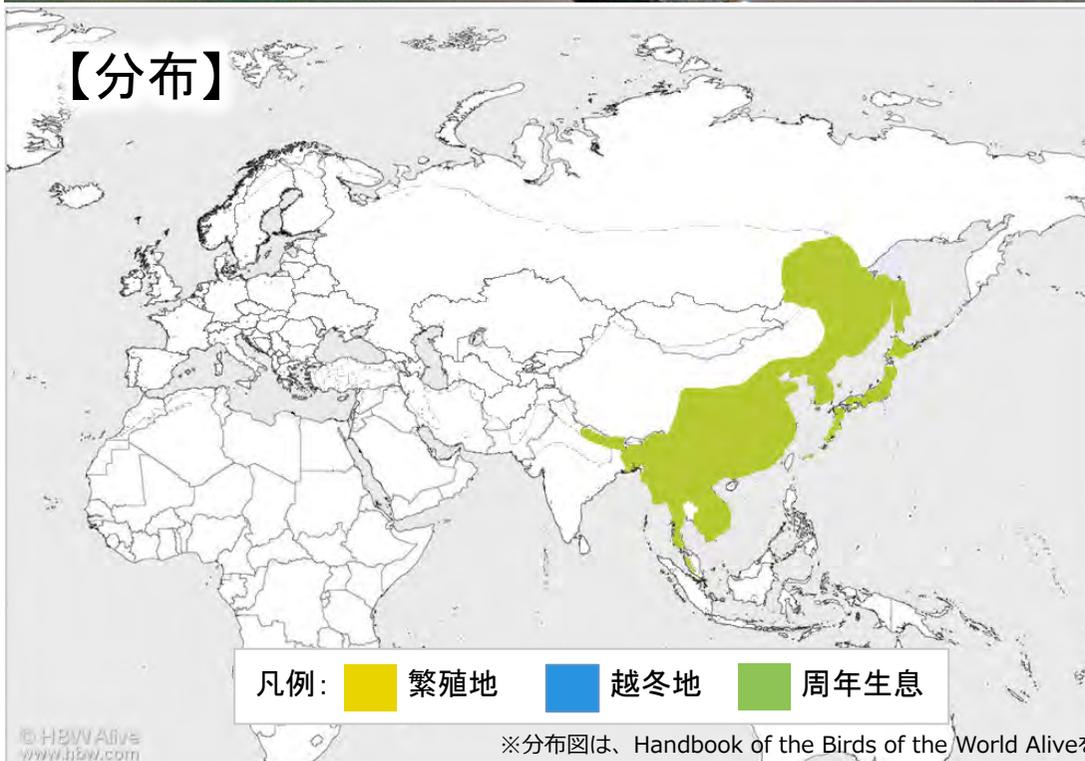
【抱卵日数】 12～13日

【育雛日数】 20～22日

【抱卵の分担】 ♀のみ

【我孫子市内で見られる季節】 1年中

【分布】



※分布図は、Handbook of the Birds of the World Aliveを編集



垂直なパイプに営巣するシジュウカラ

周りを壁で囲まれていれば、天井が無い場所でも営巣します。



撮影:平岡 考

三角コーンに営巣するシジュウカラ

市街地にたくさんある、周りを囲まれた空間を見つけて営巣します。



撮影：平岡 考

街路樹の樹洞に営巣するシジュウカラ

シジュウカラは、樹洞など周りを囲まれた空間を営巣場所を選び、コケや獣毛を敷き詰めて卵を産み、子育てします。

シジュウカラ用の巣箱だけど住みやすそうだなあ。ちょっと間口がせまいけど。直径3cmあると大満足。おじゃましまーす。



ヒヨドリ

ー山の鳥から里の鳥へー

【我孫子の市街地での暮らし】

住宅地の庭木や街路樹、ビル街に植栽された植木などの樹上に巣をつくり子育てする姿をよく見かけます。4~5月と9~10月には、それぞれ北、南へ向かって上空を飛ぶ渡りの群れを見かけます。冬期は庭先の餌台にもよく姿を現します。果実が好物ですが、パン屑やお菓子のかけらなども食べます。

【山の鳥から里の鳥へ】

今では全国の市街地で一年中見られる身近な鳥ですが、東京都では1970年代まで、山地で子育てし、冬期に市街地に降りてくる鳥でした。東京都心部で普通に繁殖するようになったのは、1980年代に入ってからです。

本州では、春と秋に、昼間に群れで移動するヒヨドリの姿を見かけます。足環による標識調査では、北海道から本州中部や新潟から九州などへ移動したことが確認されていますが、どこのヒヨドリがどこへ移動するのか、はっきりしたことはよく分かっていません。

【人工素材を使った巣づくり】

ヒヨドリの巣は、草の茎や葉、小枝などをおわん型に織り込んだものです。

しかし、市街地で見られる巣のほとんどにポリエチレン性のスズラン紐が使われています。人工素材は、腐りにくく丈夫なため、巣の構造を維持するためには有利なものと思われれます。反面、脚がからまって動けなくなる危険性もあります。

ヒヨドリ Brown-eared Bulbul



【分類】 スズメ目ヒヨドリ科

【学名】 *Hypsipetes amaurotis*

【食べ物】 昆虫食・果実食（昆虫、果実、種子など）

【営巣場所／形／巣材】 樹上／お椀型／枯れ草など

【産卵期】 5～7月

【配偶形式】 一夫一妻

【一腹卵数】 3～4卵

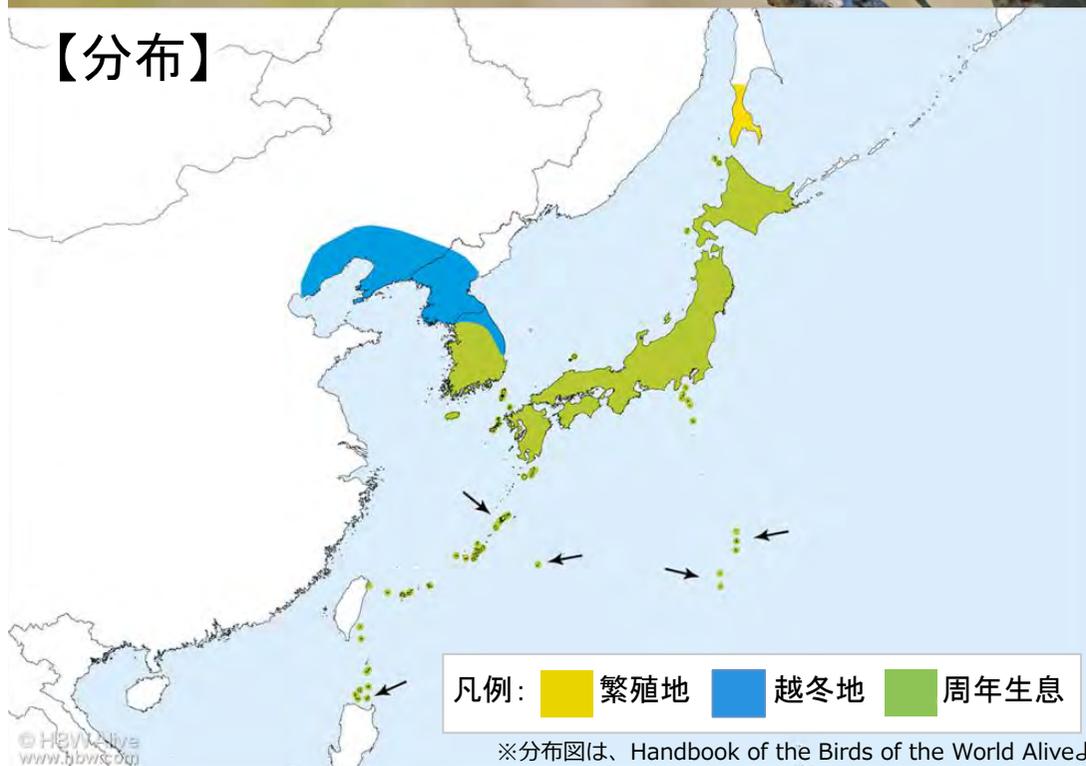
【抱卵日数】 13～14日

【育雛日数】 10～11日

【抱卵の分担】 ♀のみ

【我孫子市内で見られる季節】 1年中

【分布】

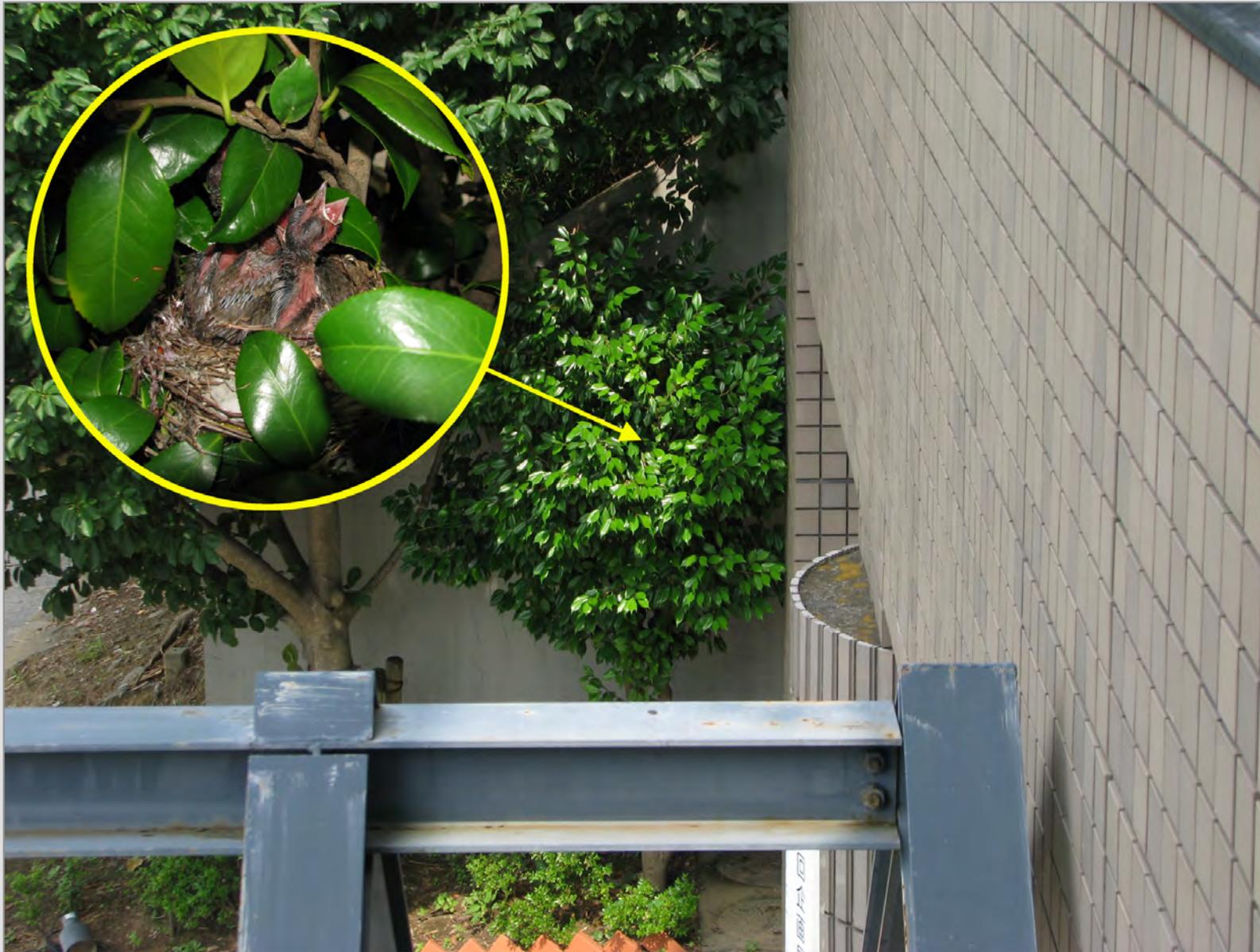




撮影:小笠原征紀

ピラカンサの果実を食べるヒヨドリ

果実の好きなヒヨドリは、冬期、樹林地の餌が少なくなると庭木の果実を食べに来ます。



建物近くの庭木に営巣したヒヨドリ

人の気配のする建物の周辺は、天敵が近づきにくく、ヒヨドリにとっては安心できる営巣場所です。



餌台に来るヒヨドリ

冬、庭先の餌台にミカンやリンゴなどの果実を置くと、果汁が好きなヒヨドリがやって来ます。

ムクドリ

—駅前でにぎやかに群れる—

【我孫子の市街地でのくらし】

夏の夕暮れ、我孫子駅や天王台駅前では、ムクドリの群がにぎやかに鳴きながら街路樹にねぐら入りする光景が見られます。ムクドリは、4月に入ると人家の戸袋や街中の広告塔の隙間に巣材を運び、子育てを始めます。水田や畑、公園やゴルフ場の芝生など、開けた草地で餌を採ります。6月になると巣立ったヒナ連れの家族が集まり始め、夜は集団でねぐらをとるようになります。これを夏ねぐらと言い、駅前の街路樹など人通りの多い場所に形成されます。我孫子市では、2001年からJR常磐線の天王台駅でにぎやかな夏ねぐらが出現し、2011年からは我孫子駅でも夏ねぐらが形成されるようになりました。

【住環境の整った市街地でのくらし】

ムクドリは、本来、森林の樹洞で営巣する鳥です。市街地では、子育てできる樹洞は減少しましたが、人家の戸袋や橋桁の隙間など、樹洞に代わる営巣環境がいたるところに見つかり、不自由しません。また、市街地周辺の公園やゴルフ場は、絶好の採餌場所となっています。

駅前のビルに囲まれた、人通りの多い明るい繁華街の街路樹は、雨風をしのぎ、オオタカやフクロウなど天敵のいない安全なねぐらを提供しています。人が利便性を追求してつくってきた市街地は、ムクドリにとってもすみやすい環境を整えてきたこととなります。

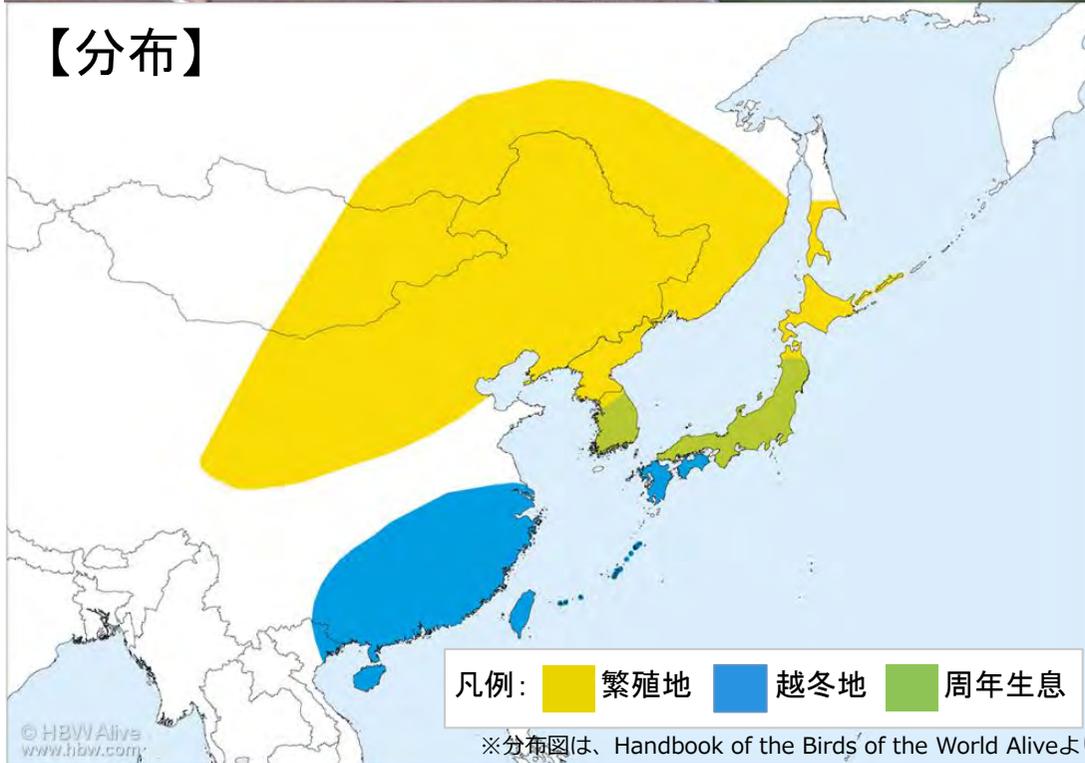
【人との軋轢が発生】

人の近くでねぐらをとるムクドリの群れが増えたことにより、夜間の鳴き声による騒音や、糞害など、人のくらしとの軋轢が生じています。追い出すだけでは、市街地の間を行き来するだけで、解決は出来ません。代替りのねぐら場所を用意するなど、鳥と共存するための新たな知恵が必要になっています。

ムクドリ White-cheeked Starling



【分布】



※分布図は、Handbook of the Birds of the World Aliveより引用

【分類】 スズメ目ムクドリ科

【学名】 *Spodiopsar cineraceus*

【食べ物】 昆虫食・果実食（昆虫、果
実など）

【営巣場所／形／巣材】 樹洞・人工構
造物／巣材敷き詰め／枯れ草など

【産卵期】 4～7月

【配偶形式】 一夫一妻

【一腹卵数】 4～7卵

【抱卵日数】 12～13日

【育雛日数】 21～23日

【抱卵の分担】 ♂=♀

【我孫子市内で見られる季節】 1年中



駅前の街路樹にねぐら入りするムクドリ

6月中旬頃から、日が暮れると、巣立ったヒナとともに駅前の街路樹に次々とねぐら入りします。



撮影：井田俊明

建物壁面のレンガの隙間に営巣したムクドリ

本来は、樹林地の樹洞に営巣しますが、都市ではそれに代わる場所として人工構造物の隙間を利用して子育てします。



夕暮れ時電線に群れるムクドリ

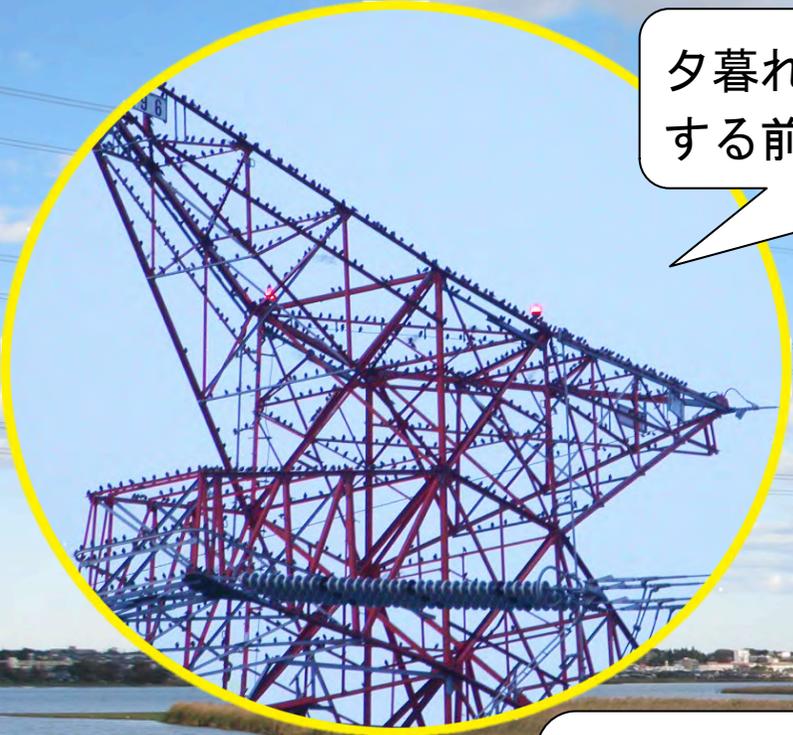
ねぐら入りする前に、近くの電線に一旦集まります。やがて上空を集団で旋回した後、一斉にねぐらに飛び込みます。

夏の夜、駅前で群れて騒ぐと、迷惑めいわくがられることもあるんだ。でも、畑の農作物の害虫もたくさん食べて人の役に立っているんだよ。



木の実を食べた後、消化できない種子^{しゆし}を吐き
戻したり糞^{ふん}として出すことで、自分で餌の植物
の種蒔^{たねま}きをしていることになるんだ。





夕暮れ時、ヨシ原にねぐら入りする前に、鉄塔に集まります。



鉄塔の下には、ムクドリが吐き出した種子がたくさん落ちてきます。



吐き出した種子が地面に落ちると発芽して、そこに木の実のなる植物が育ちます。

ムクドリの夏のねぐらが見られる手賀沼のヨシ原の風景

イソヒヨドリ

—我孫子の新住人—

【我孫子の市街地でのくらし】

イソヒヨドリは、我孫子では2000年以降、我孫子駅周辺で観察されるようになりました。2014年にビルの上でさえずる姿が、2015年にはヒナへの餌運びが確認されました。それ以降、毎年ヒナあるいは営巣場所が観察され、イソヒヨドリは、我孫子で繁殖する鳥への仲間入りをしました。

繁殖期の餌は、空き地やベランダの植木、線路沿いの路面でバッタやイモ虫・ハチ・ハエ・クモ・ヤモリなどを食べるほか、空中でチョウやトンボも捕らえて食べます。

我孫子では、周年通じてイソヒヨドリの観察記がありますが、同じ個体が年中見られるのか、入れ替わっているのか、季節移動についてはまだよく分かっていません。

【岩礁海岸から市街地へ】

イソヒヨドリは、本来、岩礁海岸に生息し、地上や潮溜まりで小動物を食べ、石垣や岩の割れ目などを利用して営巣していました。

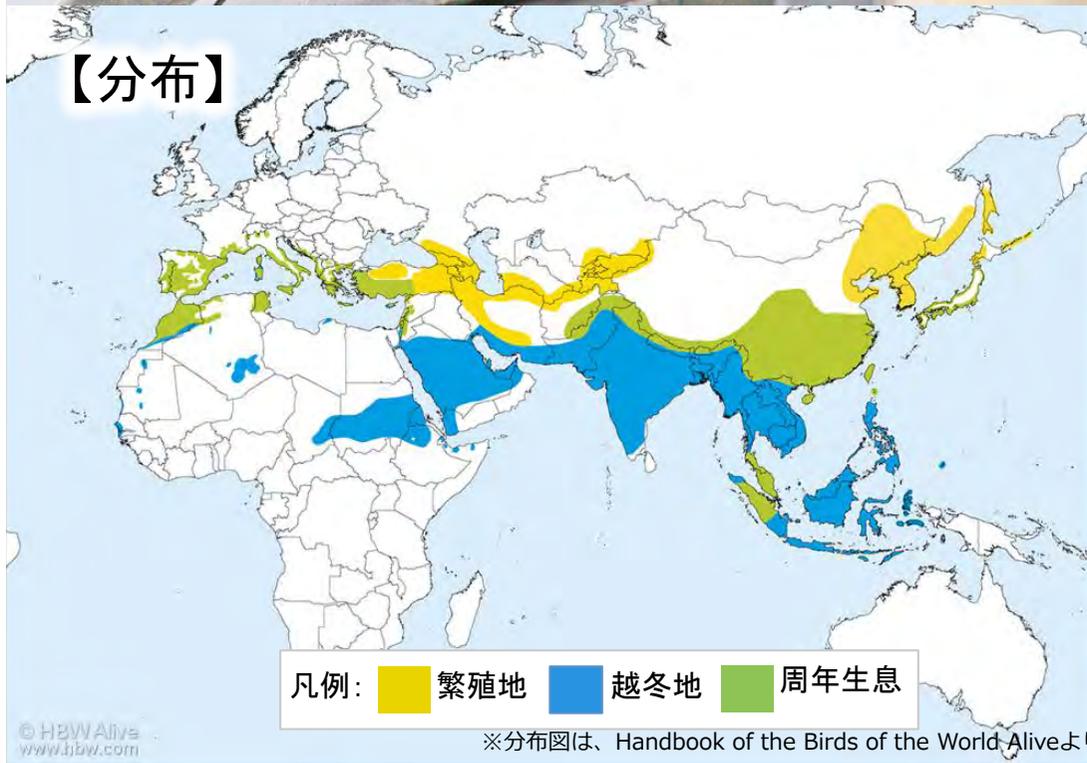
1970年代から海岸から離れた内陸でも見られるようになり、1980年代には海岸から10km以上も内陸の繁殖地が見つかるようになりました。営巣場所に選んだのは、ビルの屋根や屋上の隙間など、自然の岩場に似た環境です。

イソヒヨドリがなぜ、市街地に進出してきたのか、その明確な理由は、まだ明らかになっていません。

イソヒヨドリ Blue Rock Thrush



【分布】



【分類】 スズメ目ヒタキ科

【学名】 *Monticola solitarius*

【食べ物】 昆虫食（昆虫、両生類、は虫類、果実、種子など）

【営巣場所／形／巣材】 岩の隙間・人工構造物の隙間／巣材敷き詰め／枯れ草など

【産卵期】 2～8月

【配偶形式】 一夫一妻

【一腹卵数】 4～6卵

【抱卵日数】 12～15日

【育雛日数】 15～18日

【抱卵の分担】 ♂＜♀

【我孫子市内で見られる季節】 1年中



マンションの手すりの上でヒナに給餌するイソヒヨドリ

コンクリートで囲まれた市街地で、上手に餌を見つけてヒナを育てます。



市街地に生息するイソヒヨドリ

本来、岩場をすみかとするイソヒヨドリにとって、ビルが立ち並ぶ都市は、構造的に似ている要素があり、岩場に代わる生息環境となっています。



トビズムカデ



ニホントカゲ



クロアゲハ幼虫



ヤブキリ

イソヒヨドリが見つけたさまざまな餌

ヒナを育てるために、市街地でムカデやトカゲやバッタやイモムシを見つけてきます。

我孫子の新住人です。よろしく！
ぼくのかたは、これから少しずつ語ってい
くよ。



ハクセキレイ

—昔は冬鳥、今は留鳥—

【我孫子の市街地での暮らし】

公園の地面や芝生の上、また駐車場やアスファルト道路の上などでも餌を食べる姿をよく見かけます。春先、人家の軒先、鋼材の隙間、神社の石灯籠の中などさまざまな人工構造物の隙間に営巣し、子育てする姿を見かけるようになります。

子育てが終わる秋、夕方になると駅前の街路樹などに集まり出し、集団でねぐらをとるようになります。

【水辺の冬鳥から都市鳥へ】

ハクセキレイは、かつて本州では冬鳥でした。1955年に北海道と東北地方へ、1970年代に関東地方へと海岸線沿いに繁殖地が南下してきました。1980年代には関東地方の内陸部での繁殖例が増えました。

本来は、水辺の昆虫などを餌とする鳥でしたが、市街地へ侵入するにつれ、公園に落ちたポップコーンやパン屑を食べるようになり、幅広い食性が観察されるようになりました。

繁殖期には、営巣場所として工場や倉庫など人工構造物を利用し、秋から冬にかけては、繁華街のビルや街路樹でねぐらをとるようになり、都市鳥として定着しました。

日本の海岸沿いに分布を南へ広げてきたハクセキレイは、まず港に建設された工場や倉庫を営巣場所として選び、やがて内陸の市街地へと生息地を広げていきました。

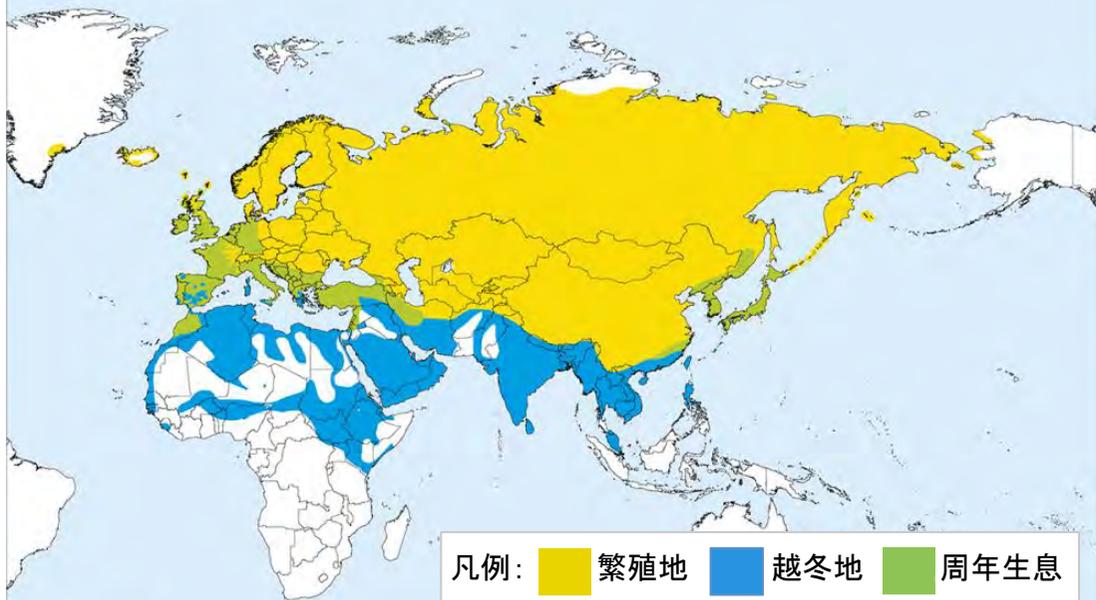
【夜の繁華街で採餌】

市街地へ進出したハクセキレイは、駐車場で車に付着した昆虫の死体を食べたり、餌台のパン屑を食べたり、人の活動と関わりが深くなっています。さらに、繁華街の街灯に集まる昆虫を、夜間に食べる姿も観察され、ますます人のくらしに同調した行動が見られるようになりました。

ハクセキレイ White Wagtail



【分布】



【分類】 スズメ目セキレイ科

【学名】 *Motacilla alba*

【食べ物】 昆虫食（おもに水生昆虫）

【営巣場所／形／巣材】 棚や隙間／皿形／枯れ草や獣毛など

【産卵期】 4～5月

【配偶形式】 一夫一妻

【一腹卵数】 4～5卵

【抱卵日数】 12～13日

【育雛日数】 14～15日

【抱卵の分担】 ♂＝♀

【我孫子市内で見られる季節】 1年中



街路樹にねぐら入りするハクセキレイ

人通りの多い場所の街路樹は、天敵も少なく安全なため、ハクセキレイがねぐらとして利用します。



石灯籠の中で営巣するハクセキレイ

本来、土手の窪地や隙間で繁殖するハクセキレイは、都市の中では似た構造を探して営巣てします。



撮影:井田俊明

街灯の明かりをたよりに餌を採るハクセキレイ

市街地では、街路灯に集まる昆虫をねらい、夜間も活動するハクセキレイやツバメが現れました。

カルガモ

—水辺への大行進—

【我孫子の市街地でのくらし】

手賀沼の水辺周辺では、カルガモが多数見られ子育てしています。沼から少し離れた草の中に営巣し、ヒナが一斉に孵化すると、安全な水辺にメスが誘導します。

しかし、最近、水辺から離れた場所に営巣するケースがみられるようになりました。工場の敷地内の植込みの中や住宅地の植込み、また屋上の緑化の中で営巣した例もあります。

天敵のカラスやタヌキは、市街地の人の気配のある場所には近寄りません。人の存在が、結果的にカルガモの巣を天敵から守っています。

【カルガモの行進】

カルガモは、孵化すると、水辺まで歩いて移動しなければなりません。都市化が進めば進むほど、移動の危険度が増します。大きな車道を横切ったり、三面護岸の溝を飛び越えたり、いくつもの障壁を乗り越えなければいけないからです。

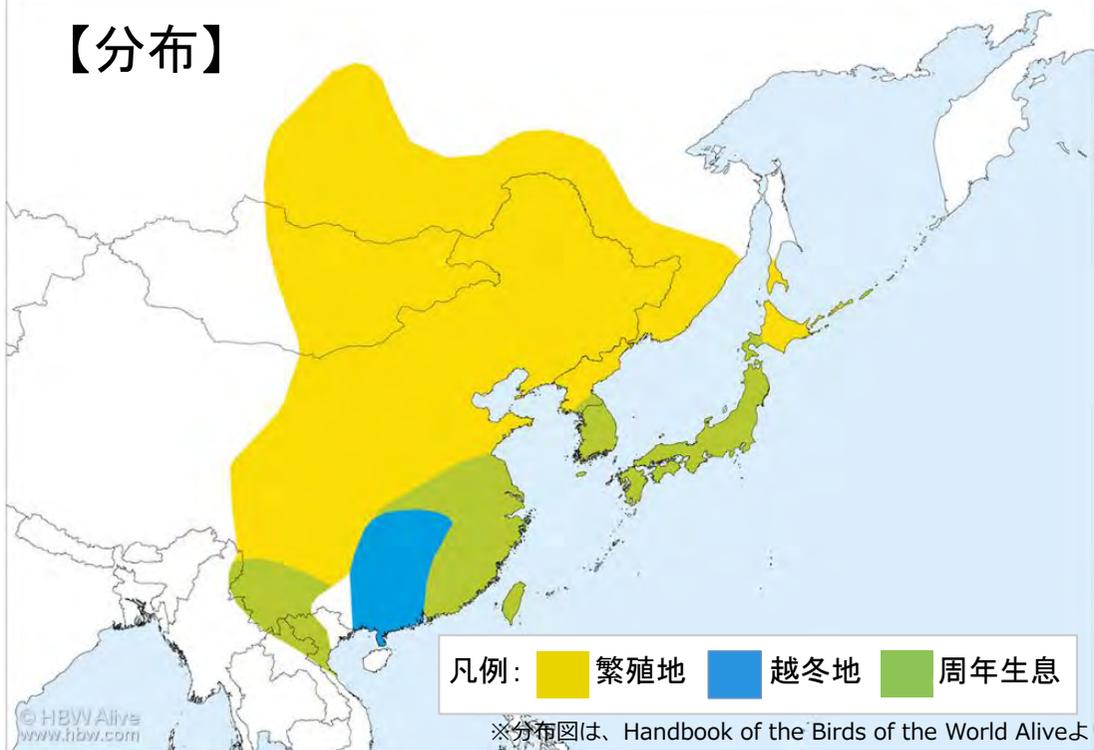
カルガモにとっては、できるだけ見つけにくい場所で、産卵から孵化までを行い、孵化したならば、できるだけ早くヒナを水辺へ移動するのが最適な子育ての方法です。

内陸の草の中の巣は見つけにくく安全で、孵化率が高くなる利点がありますが、孵化後の移動時のリスクが大きいという欠点もあるため、どこに巣をつくるべきかがカルガモにとっては大きな問題です。

カルガモ Eastern Spot-billed Duck



【分布】



※分布図は、Handbook of the Birds of the World Aliveより引用

【分類】 カモ目カモ科

【学名】 *Anas zonorhyncha*

【食べ物】 植物食（昆虫、魚、種子、
葉・茎・根など）

【営巣場所／形／巣材】 地上／皿型／
枯れ草、綿羽など

【産卵期】 4～7月

【配偶形式】 一夫一妻

【一腹卵数】 10～12卵

【抱卵日数】 24～25日

【育雛日数】 早成性（孵化直後離巢）

【抱卵の分担】 ♀のみ

【我孫子市内で見られる季節】 1年中



会社敷地内の生垣に営巣したカエルガモ

安全な草地という条件で選ばれた営巣場所は、会社敷地の植込みの中でした。



緑化した屋上に巣をつくったカルガモ

市内の図書館屋上の緑地に巣を作ったカルガモ。屋上で生まれたヒナを水面に誘導するまでにはさまざまな困難が待ち受けています。



利根川の河原の広大な草地に営巣したカルガモ

本来、カルガモは、水辺に近く天敵に見つかりにくい草地の中に巣をつくります。都市では、近年こうした環境が減っています。

水辺に近くて、かつ安全・安心な巣造りができる一等地は、なかなか見つからないんだね。



ツミ

—市街地の猛禽—

【我孫子の市街地でのくらし】

我孫子市内で観察記録があるのは1986年以降で、2000年以降は毎年確認されています。その後繁殖も確認され、2005年の我孫子ゴルフ倶楽部場内・2007年の布佐長丁西公園と船戸の緑地・2009年の布佐第一公園・2010年の緑の香取神社・2013年の市役所付近の緑地での営巣情報が鳥の博物館に寄せられました。営巣地の近くでは、ツミの親鳥が、巣のヒナにスズメなどの小鳥を運ぶ姿が見られます。

【市街地に進出した猛禽類】

ツミが関東地方の市街地の公園などで繁殖が確認されるようになったのは1980年代に入ってからです。それ以前は、山地の鳥として生態もあまり知られていませんでした。

ツミが市街地で繁殖するようになった理由は、よく分かっていませんが、繁殖できる営巣木が育ったこと、市街地には競合する猛禽類がないこと、スズメなど餌となる小鳥が多くいること、などが考えられます。

【ハシブトガラスとの攻防】

ツミの巣のまわりには、よくオナガが巣をつくることがあります。ツミがオナガの巣をねらうハシブトガラスを撃退してくれるという恩恵があるからだと考えられています。オナガにとっては、ありがたい助っ人の登場でした。

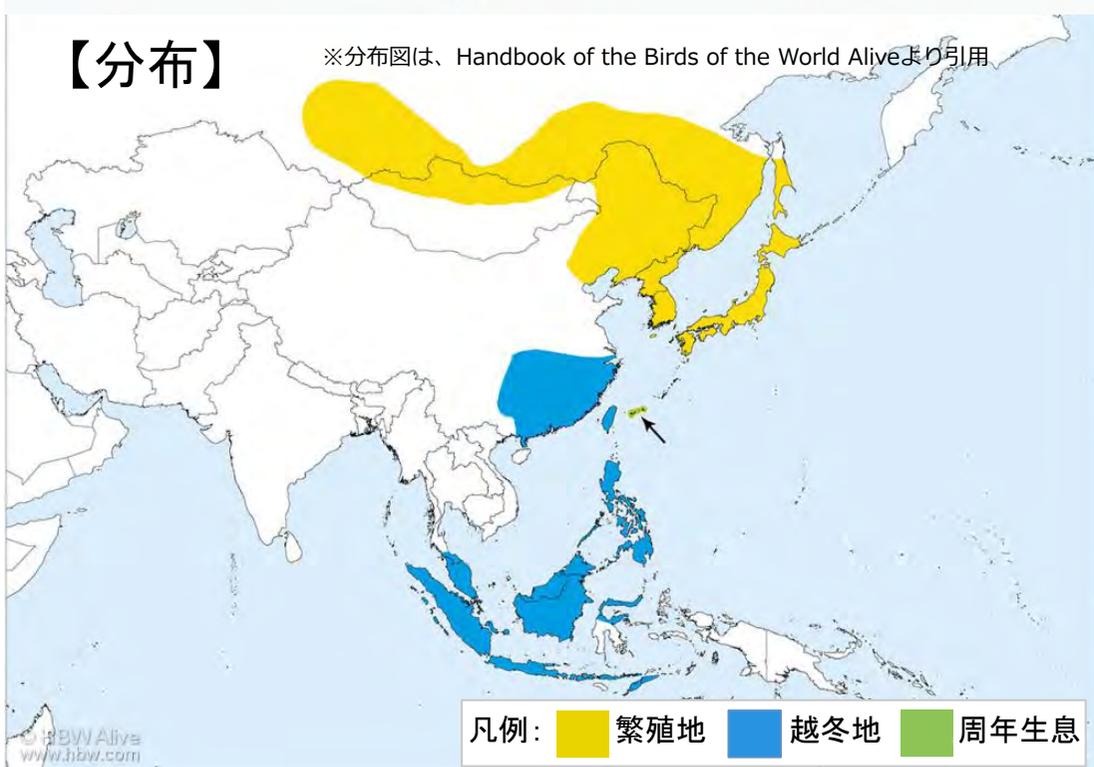
しかし、ツミの営巣地の近くでハシブトガラスが営巣すると、ツミの巣を襲い排除するため、ツミは、ハシブトガラスを避けて営巣するようになり、オナガはツミをたよりに出来なくなってきました。

ツミ Japanese Sparrowhawk



【分布】

※分布図は、Handbook of the Birds of the World Aliveより引用



【分類】 タカ目タカ科

【学名】 *Accipiter gularis*

【食べ物】 肉食（昆虫、ほ乳類、鳥類）

【営巣場所／形／巣材】 樹上／お椀型／
枯れ枝や木の葉

【産卵期】 4～9月

【配偶形式】 一夫一妻

【一腹卵数】 3～5卵

【抱卵日数】 35日

【育雛日数】 24日

【抱卵の分担】 ♀のみ

【我孫子市内で見られる季節】 1年中



ヒナへ餌を運ぶツミ

ヒナの待つ巣へ餌を運ぶため、捕らえたスズメを樹上でさばいているツミのメス。



住宅地内の公園のコブシの木に営巣したツミ

ツミが市街地の近くで営巣するようになったのは、1980年代以降のことです。



ツミの幼鳥とツミの巣の近くで営巣するオナガ

ツミが市街地で繁殖するようになると、ヒナの大敵のカラスを追い出してくれるツミを用心棒がわりにして、オナガが周辺で営巣することがあります。

無敵のカラス軍団から巣を防衛するのは、小型のツミにとっては荷が重すぎるのだらうね。



チョウゲンボウ

ービル街に進出したハヤブサの仲間ー

【我孫子の市街地での暮らし】

我孫子の市街地ではチョウゲンボウの繁殖は確認されていませんが、隣接する柏市では、2000年からビルの排気口に営巣するチョウゲンボウが確認されています。

利根川を越える常磐線の鉄橋では、1992年以降、チョウゲンボウが複数つがい繁殖しています。周辺に広がるゴルフ場や運動公園・草地は、ネズミ類や小鳥を捕らえるための絶好の狩り場となっています。

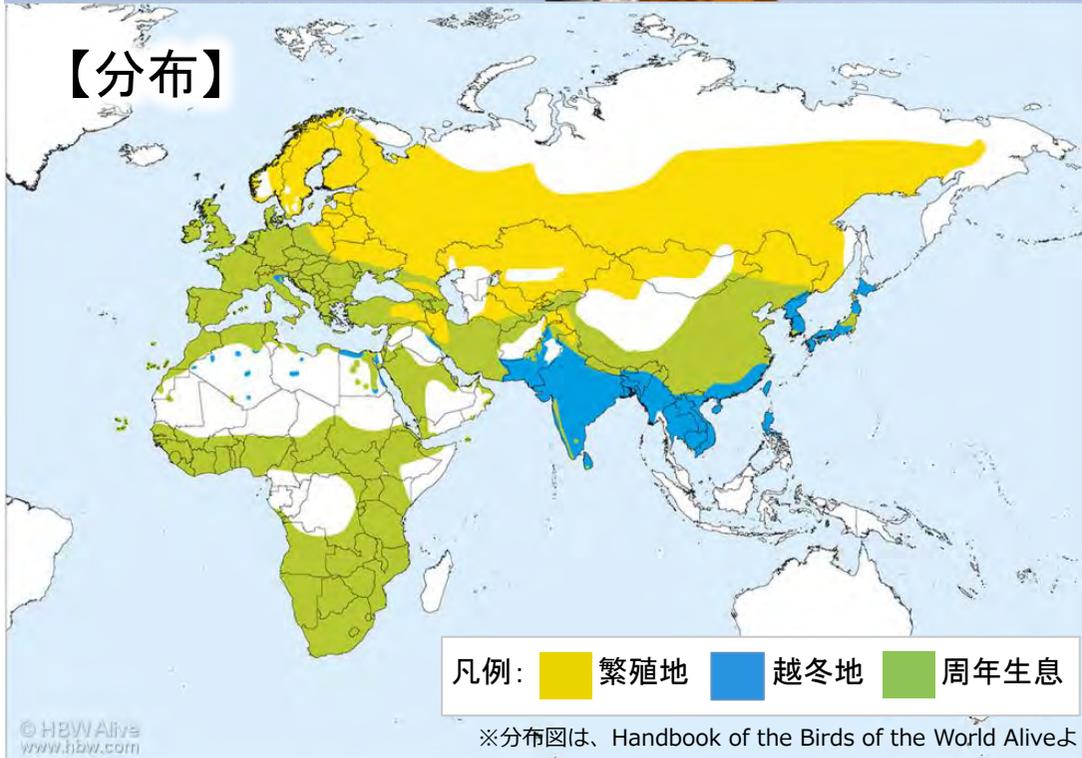
【崖地から都市のビルへ】

チョウゲンボウは、本来崖地の岩場に営巣し、開けた草地でハタネズミや小鳥などを餌として暮らしていました。しかし1970年頃から崖地での営巣が減り、東京都や神奈川県では倉庫や建造物での繁殖が確認され始めました。1980年代には、本州中部の各地で人工構造物での繁殖が確認されるようになりました。現在、都市のビルは、チョウゲンボウにとって自然の崖地以上に子育てに適した環境になっているのかも知れません。

チョウゲンボウ Common Kestrel



【分布】



【分類】 ハヤブサ目ハヤブサ科

【学名】 *Falco tinnunculus*

【食べ物】 肉食（昆虫、ほ乳類、鳥類
など）

【営巣場所／形／巣材】 岩棚や人工
構造物の隙間／なし／なし

【産卵期】 4～6月

【配偶形式】 一夫一妻

【一腹卵数】 3～6卵

【抱卵日数】 27～29日

【育雛日数】 27～30日

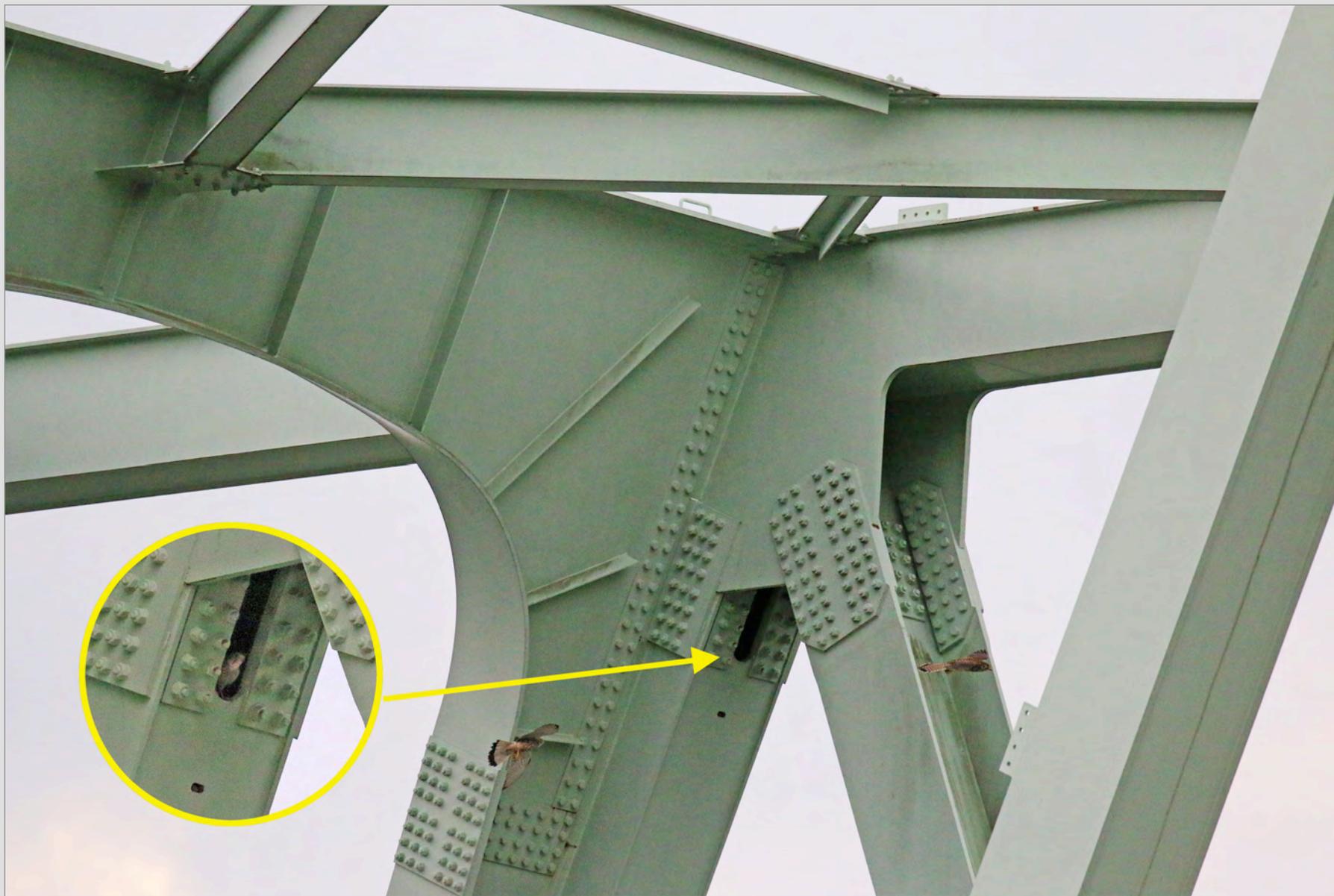
【抱卵の分担】 ♂ < ♀

【見られる季節】 1年中



柏市のビルの換気口で繁殖するチョウゲンボウ

ビルが立ち並ぶ柏駅前で、チョウゲンボウの営巣が2000年頃から確認されています。



常磐線の鉄橋で繁殖するチョウゲンボウ

1992年以降、常磐線の鉄橋のすき間に毎年営巣するようになりました。



ゴルフ場の上を飛び回るチョウゲンボウの雌雄

上空が開けたゴルフ場は、チョウゲンボウにとって餌を捕ったり求愛行動するために大切な生活空間です。

チョウゲンボウもビルや鉄橋の
スキ間が好きなんだ。



(続)我孫子の都市鳥

ハヤブサ ービル街のスピードスターー

ハヤブサは、海岸や山地の断崖のくぼみなどに巣を作る中型の猛禽類です。空中を飛んでいる小型～中型の鳥を蹴ったり掴みとったりして捕えるダイナミックな狩りを行います。同じ仲間のチョウゲンボウよりも一回り大きく、カラスより少し小さいくらいの大きさです。

チョウゲンボウと同様に、都市に進出したハヤブサの仲間、高層ビルを餌を探すための止まり場や休息の場所として利用しています。チョウゲンボウよりも体が大きいため、排気口では繁殖できませんが、人の立ち入れないビルの屋上やテラスなどで繁殖する例が世界中で報告されています。

都市においては、公園で人の撒く餌に集まるドバトやユリカモメなどの鳥をターゲットに狩りをしているのが観察されています。手賀沼でも、秋から冬にかけて、沼沿いで狩りをするハヤブサをしばしば見ることができます。



オオタカ

ー都市に進出した狩人ー

オオタカは中型のタカの仲間で、同じ仲間のツミよりずっと大きく、カラスくらいの大きさです。主に、ムクドリからハトくらいの中型の鳥を捕獲して食べます。森の中の大きなスギやヒノキなどの木に巣を作ります。個体数が少ないとされていたため、国内希少野生動植物種に指定されて手厚く保護されていましたが、最近になって指定が解除されました。個体数は増えているといわれていますが、地域による違いもあり、詳しいことはよくわかっていないといえるようです。

都市部でも巣を作ることのできる林があれば営巣することがあり、東京都の23区内でも繁殖しています。

我孫子市内では、市街地で繁殖しているところはありませんが、繁殖期に住宅地で狩りをする個体や、越冬期に公園でハトを襲って食べているところが観察されています。



カワラヒワ

—街路樹で繁殖する和風カナリア—

カワラヒワは濃い緑色の体色に、翼と尾の黄色が目立つアトリの仲間の小鳥です。電線や木のとっぺんに止まって「キリリ、コロコロ」とにぎやかな声でさえずります。その名の通り、河原や耕地などの開けた環境の草地や地上で、植物の種子や昆虫を採食します。

街中のケヤキやプラタナスなどの街路樹の比較的高い所に巣を作ります。巣の間の距離は非常に近く、時には数メートルしか離れていないところに2つの巣があったりします。繁殖期には多くの個体が入り出すため、巣のある街路樹はとてよく目立ちます。都市部では餌となる昆虫や草の種子が得られないため、都市に近い河川敷や空き地に飛んで行って餌をとっているようです。

我孫子市では、近くに農地や河原がある住宅地の街路樹などで多数の個体が見られることがあります。さえずりをたよりに探してみましよう。



エナガ

—雑木林の人気者—

エナガは、長い尾羽をもった白黒の小さい小鳥で、シジュウカラに近縁の仲間です。明るい林に生息し、公園などの下草の少ない林でも見られます。冬には、シジュウカラやメジロとともに、「混群」と呼ばれる複数種からなる集団を作って行動します。

エナガの巣は非常に特徴的で、外装をコケや地衣類、内装に鳥の羽毛や獣毛を敷き詰めたドーム型の形状です。血縁関係のある群れで繁殖することが知られています。

関東地方の平野部では、かつては冬だけに見られる鳥でしたが、徐々に繁殖期でも見られるようになりました。東京都内ではごく最近、2010年ごろから繁殖が確認されるようになったそうです。

我孫子市内では、住宅地に隣接する林でも繁殖しており、4月ごろから巣立ちビナを連れた家族群を見ることができます。秋から冬には混群に入って開けたところにも出てくるようになり、より姿が見やすくなります。



ウグイス

－藪にひそむ美声の持ち主－

毎年2月から3月にかけて「ホー、ホケキヨ」と朗らかなさえずりを聞かせてくれるウグイス。日本では、海岸沿いから亜高山帯まで、幅広い地域に分布しています。全身褐色で地味な見た目で、ササなどの藪（やぶ）を好み、繁殖期以外はあまり姿を見せません。

近年では、里山の手入れがされなくなって藪が増えたところで、ウグイスの個体数も増えているところが多くなっています。我孫子市でも同様に、住宅地に隣接した藪のある林や、時には遊歩道沿いの植え込みの中でも繁殖しています。ウグイスの増加に伴って、托卵するホトトギスの数も増えてきているようです。

秋から冬には繁殖する場所から少し分散し、人家の庭などでも見られるようになります。「ジャツ、ジャツ」という地鳴きをたよりに探してみましよう。



オナガ

ー青い翼の美しいカラスー

オナガは、長い尾と水色の翼が目立つカラスの仲間です。渡りをしないため日本では一年中見られます。「ギューイギューイギューイ」と騒がしい声で鳴き交わします。雑食性で昆虫や木の実を食べ、特に秋から冬にはカキなどの果実を好みます。

林の樹上に、枝で編んだ巣を作ります。群れ社会で生活し、血縁のあるヘルパーを交えて繁殖することが知られています。

都市部では林のある公園や街路樹などで繁殖します。都市に進出した小型の猛禽類のツミを利用してカラスの捕食を逃れているのではないかとされています。

我孫子市でも、ツミの巣のある場所の近くの林や街路樹で繁殖個体が見られることがあります。行動圏はあまり広くなく、市内では局地的にしか見られません。繁殖期が終わると集団が大きくなり、繁殖期にいなかった住宅地でも見られることがあります。



コゲラ

ー枯れ木を好む都市のキツツキー

コゲラは、スズメくらいの大きさの、日本で一番小さなキツツキの仲間です。いろいろなタイプの森林に生息し、都市公園などの明るい林にも生息します。嘴が小さく木に穴をあける力が弱い
ため、枯れている、または枯れかかっている木がないと巣穴を掘ることができません。こうした枯れ木を目ざとく見つけて繁殖しています。餌は枯れ木の中の昆虫のほか、アブラムシや木の実も食べます。冬にはシジュウカラやメジロとともに混群に入り、姿が見やすくなります。「ギィー」という特徴的な地鳴きで存在に気がつくことができます。

かつてはエナガと同じく森林の鳥でしたが、1980年代ごろから都市部でも普通に見られるようになり、繁殖するようになりました。都市部の中にも緑地が作られるようになったことや、都市の林が成熟して枯れ木が増えてきたことが原因ではないかと考えられています。



ハシボソガラス

－田園の鳥－

ハシボソガラスは、森林でねぐらをとり、巣をつくり子育てし、開けた草地や水田・畑で餌をとります。

したがって、おもに農村地域で人と関わりを持ったくらしをしています。

一方、農村地域に近い市街地でも見られ、ゴミ回収所に出されたゴミをあさったり、電柱を利用して巣をつくったり、市街地の環境や人の活動も利用しています。固い殻のオニグルミの果実を車に轆かせて割って食べる行動が観察されるなど、知能が発達し、環境への高い順応性を持っています。

このような特徴からは、都市鳥として市街地の優占種となりそうですが、生息環境が競合するハシブトガラスの体が大きく優位なため、東京都の都心部など大きな都市では、ほとんどハシブトガラスしか見られません。

我孫子の市街地では、ハシブトガラスとハシボソガラスが半々の割合で見られます。

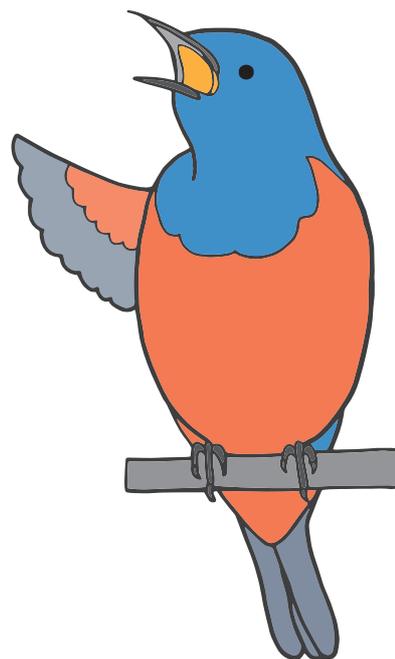
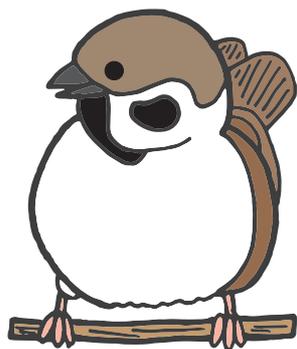


よく似たハシブトガラスとのちがいはどこで
しょう？

くちばの形や餌の採り方をくらべてみるとち
がいがわかるはず。



3.4 都市すむ鳥、すめない鳥



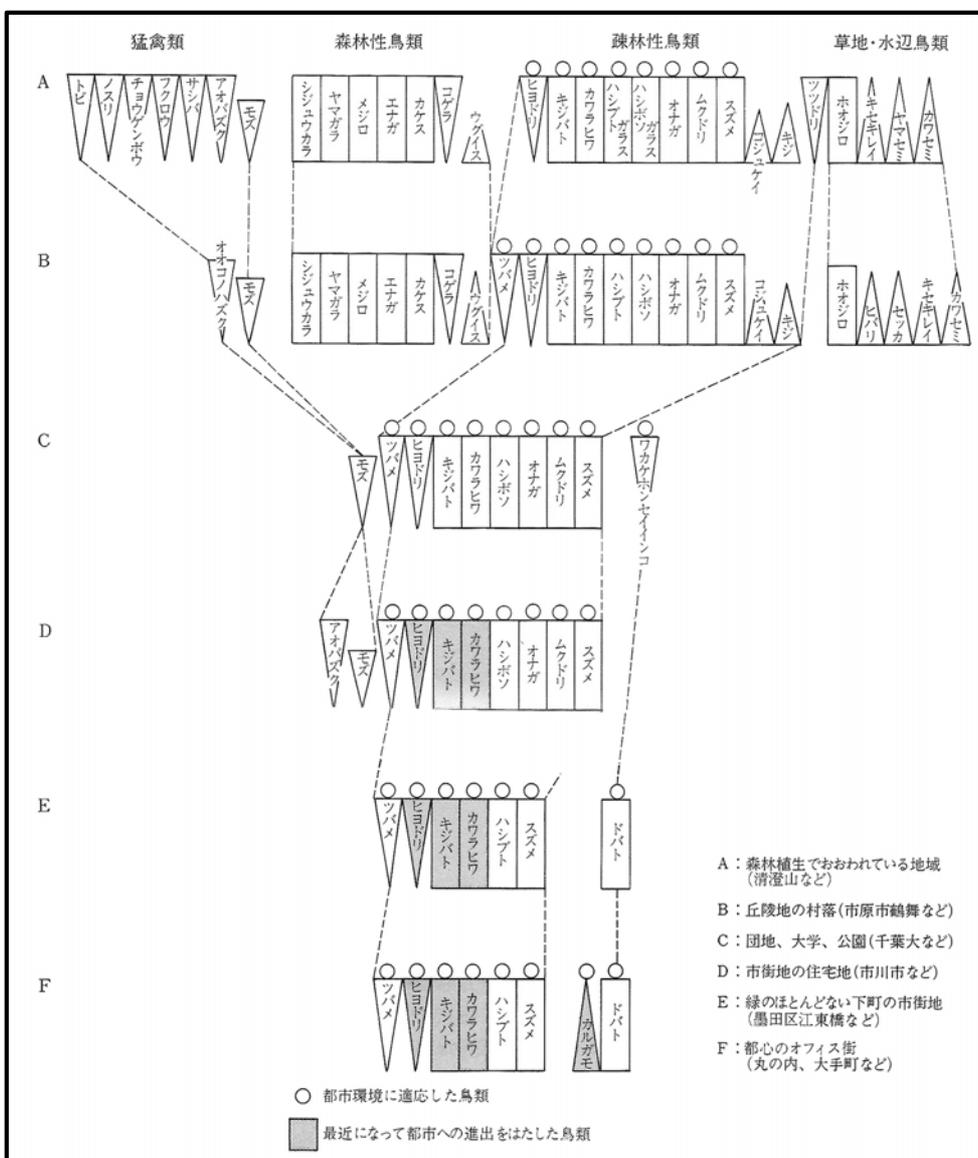
都市にすむ鳥はどこから来たのか

都市の開発が進み、自然が失われ、高層ビルとアスファルトで覆われた市街地が広がると、多くの鳥が姿を消します。しかし、一方で、こうした人工的な環境や人間活動を利用し、都市に進出してきた鳥もいます。

どんな特徴を持った鳥が都市へ進出してきたのか、房総半島から都心にかけて都市化の程度の異なるいくつかの地域における繁殖期に見られる鳥のちがいを比べた模式図（唐沢 1987）を紹介します。

我孫子ではホオジロやヒバリなど草原性の鳥が市街地では見られず、疎林性の鳥が生息しています。

また、この模式図が描かれた1987年以降、森林性のエナガや猛禽類のチョウゲンボウなど、新たに市街地に進出してきた鳥もいます。都市化とそこに見られる鳥は、人の営みを反映して変化しています。



都市化に伴う繁殖期の鳥相の変化（房総半島から都心にかけての模式図）

都市化に伴い、猛禽類、森林性鳥類、草原性鳥類の減少・消滅が著しい。逆に、都市環境に適応している鳥の大部分は疎林性の人里の鳥を起源にしていることがわかる。

我孫子の市街地、田園地帯、 森林にすむ鳥を比べてみると

我孫子市には、沼や川など水辺の環境、水田や畑、森林、市街地などさまざまな環境があります。我孫子市自然環境調査-鳥類調査報告書-（我孫子市 1995）では、これらの環境別に鳥類の個体数調査を行っています。この調査結果から、市街地、田園地帯、森林、それぞれの鳥相を比べてみます。



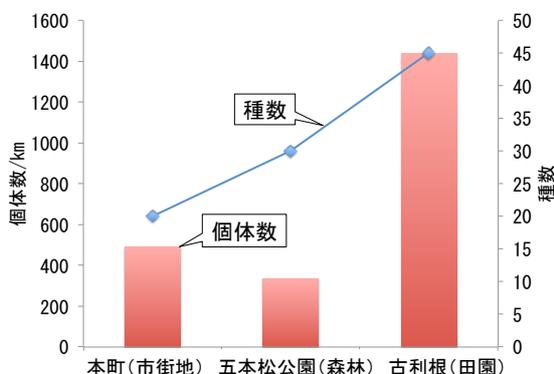
本町コース（市街地）



五本松公園コース（森林）

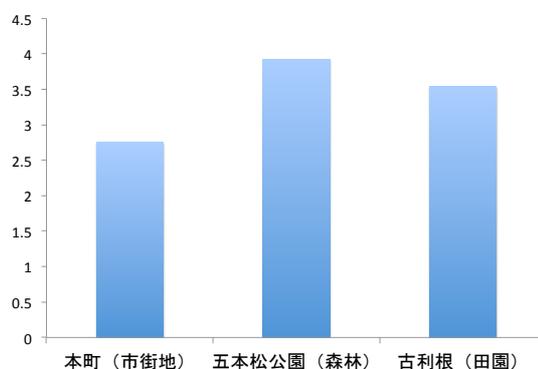


古利根コース（田園）



個体数と種数

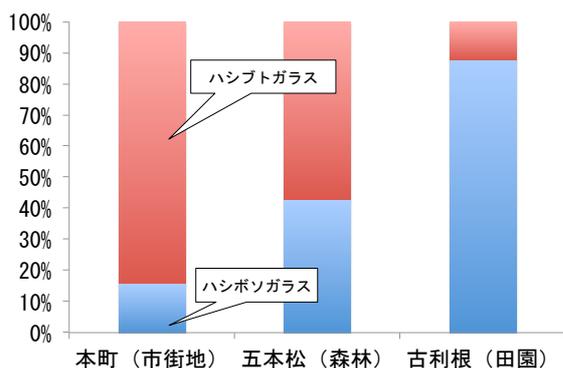
市街地では見られる種類が最も少ない。



シャノン・ウィナーの多様度指数*

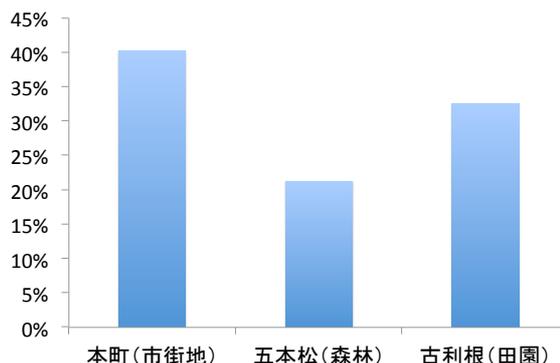
市街地では多様度指数が最小であることから、ごく少数の限られた種類の個体数だけが多いことが分かる。

*シャノン・ウィナーの多様度指数=生物群集内の多様性（多くの種類が均等に存在している状態）の程度を示す指数の一つ。



ハシブトガラスとハシボソガラスの割合

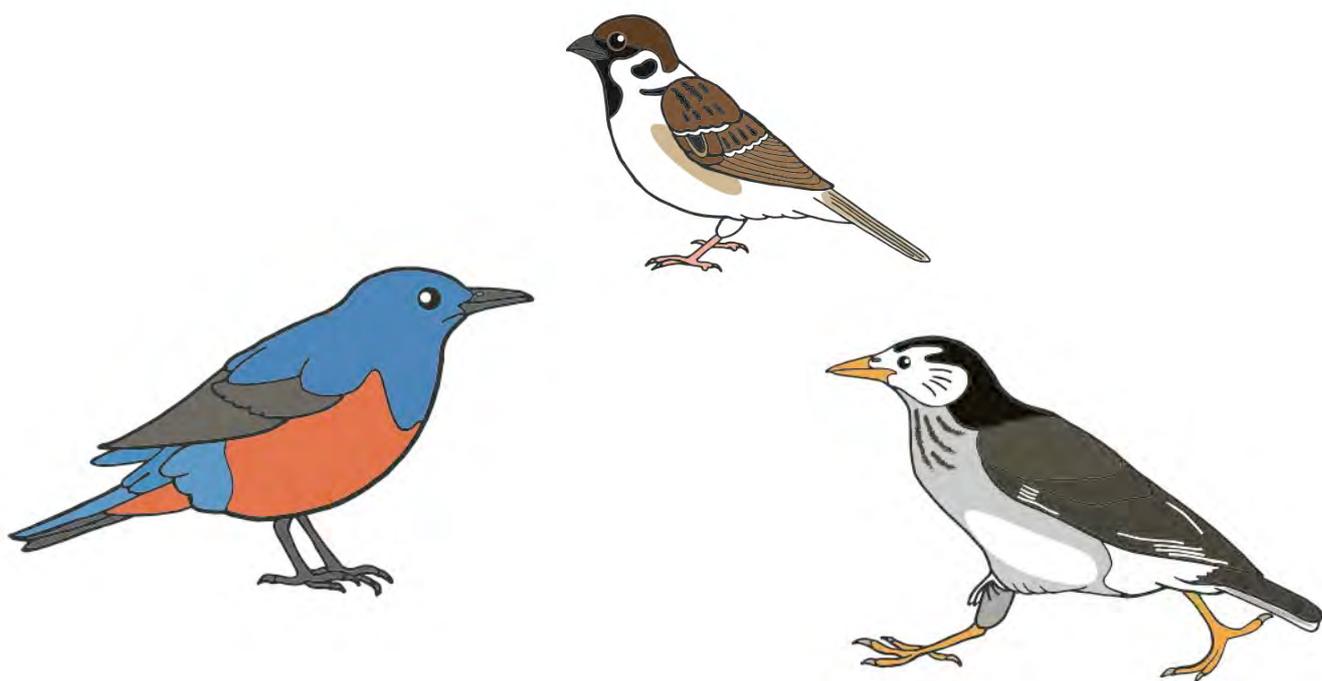
市街地ではハシボソガラスよりもハシブトガラスの方が多く見られる。



スズメの優占率

市街地ではスズメの個体数割合が大きい

4. 人と共にくらす鳥たち



シナントロピックな鳥たち

ここまで都市鳥について紹介してきましたが、鳥が人間活動をうまく利用しているのは、都市に限った現象ではありません。農耕地が広がる田園地帯や漁業の行われる水域でも、鳥が人の活動を利用するシーンがよく見られます。

生態系の一員である人と鳥は、古くからかかわりあって暮らしてきました。ギリシャ語で、人間の近くで生活し、人間や人工物を利用して生活する野生動物のことをシナントロープ（synanthrope : syn-「共に」、anthrope「人間」）と言います。

都市から範囲を広げて、さまざまな場面で見られるシナントロピックな鳥たちの行動を見てみましょう。



トラクターの後を追うアマサギ

田んぼを耕すという人間の活動は、草の中や土中の昆虫やミミズなどを追い出し、アマサギにとっては、絶好の採餌チャンスとなります。



おこぼれの魚をねらうウミネコ

港でのイワシの水揚げを待ち、おこぼれを食べに集まるウミネコ。



すのこ板に営巣したカイツブリ

浮巣をつくるカイツブリが、すのこ板の浮力を利用して営巣しました。この時は、風と波で流されてしまいました。



カイツブリは、水上に枯れ草を積み重ねた浮き巣を造りますが、巣を離れる時には、卵を枯れ草で隠します。

カイツブリの巣

すのこの上の巣は、よく浮いて波には強そうだけど、固定されていないので流されちゃったんだね。





工事現場の盛り土に営巣したカワセミ

土木工事のために寄せた盛り土に、カワセミが穴を掘って営巣しました。



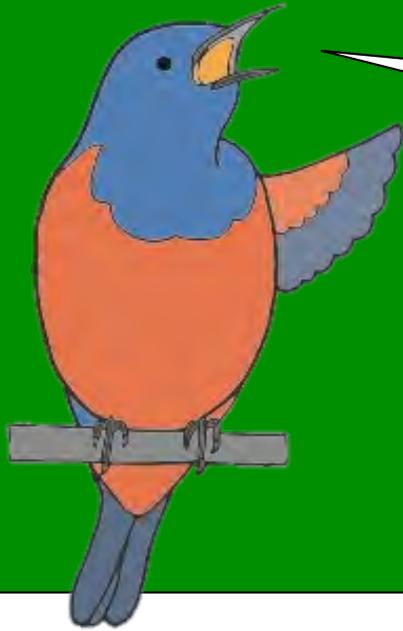
釣り人から餌をもらうコサギ

生き餌を捕らえる鳥は、一般的に知能が発達していて学習能力が高いことが知られています。毎日釣りに来る人を覚えて餌をもらいます。



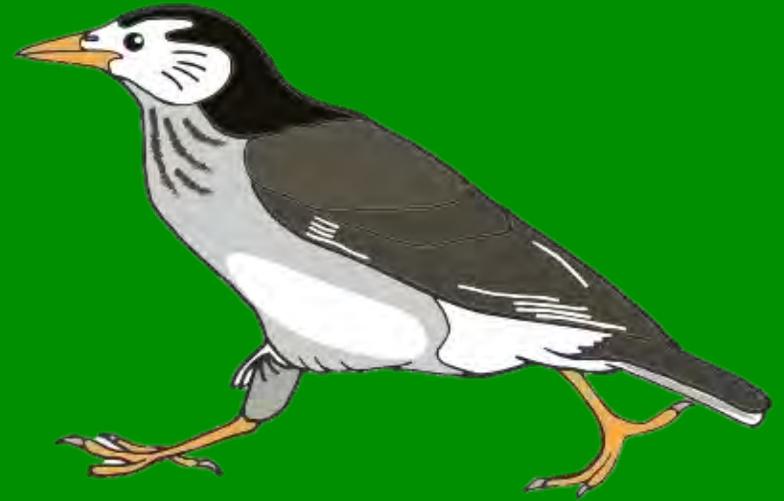
電柱に営巣したハシボソガラス

電柱・電線という人間がつくった新たな環境を利用して営巣するハシボソガラス。



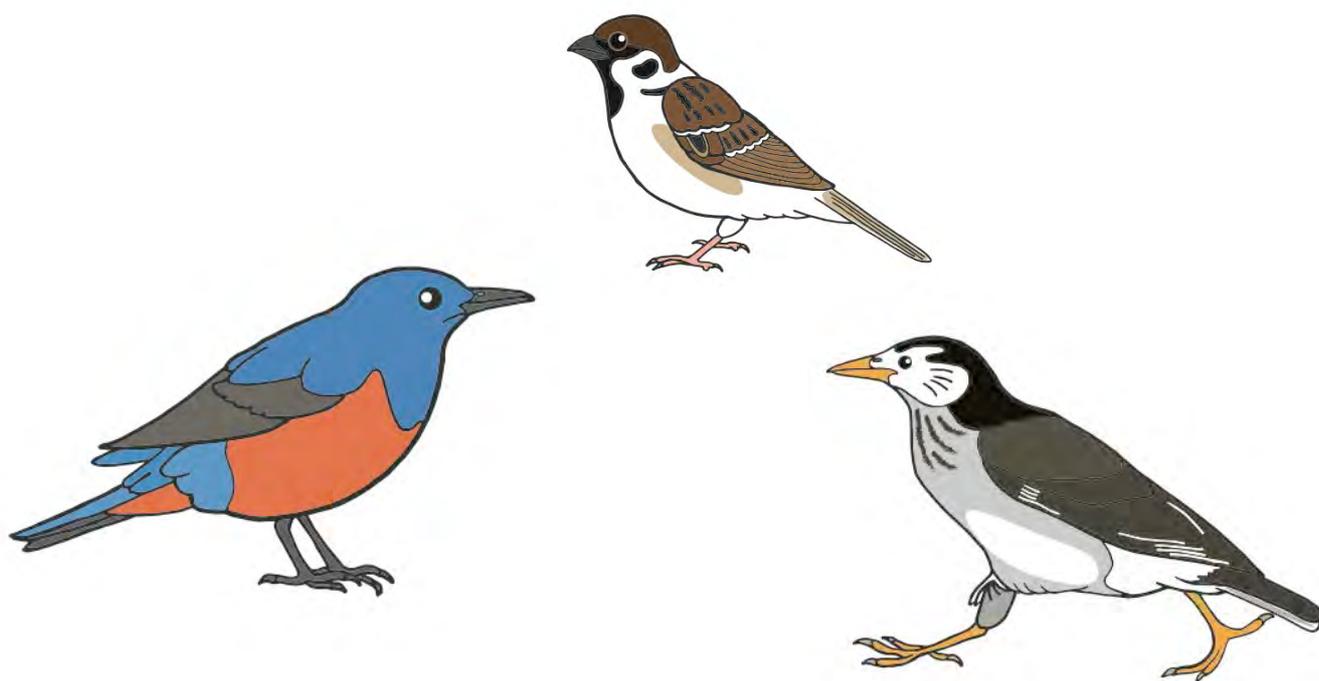
みんな抜け目ないんだね。

いやいや、助け合っている
とも言える。



生き物ってみんな関わり
合って生きているというこ
となんだね。

5. 都市鳥特設コーナー ～電柱鳥類学～



電柱鳥類学

—電柱・電線を介した都市における人と鳥との共生関係の実態解明—

提供：科研費「電柱鳥類学」

鳥類と電柱の関係

電柱や電線は日本全国、どこにでも存在する構造物です。人が住んでいるところには必ずあります。このため、都市鳥達にもさまざまな利用をされています。

減少するスズメ・巣場所としての電柱

この20年ほどの間に、スズメが減少したことが明らかになってきました(図1)。瓦屋根など旧来のスズメの営巣に適した環境の減少が、スズメ減少の一因と考えられています。都市において、スズメ達は電柱を利用して繁殖しています。

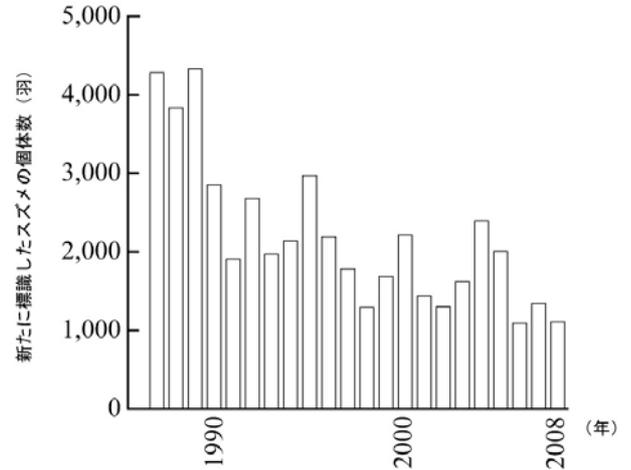


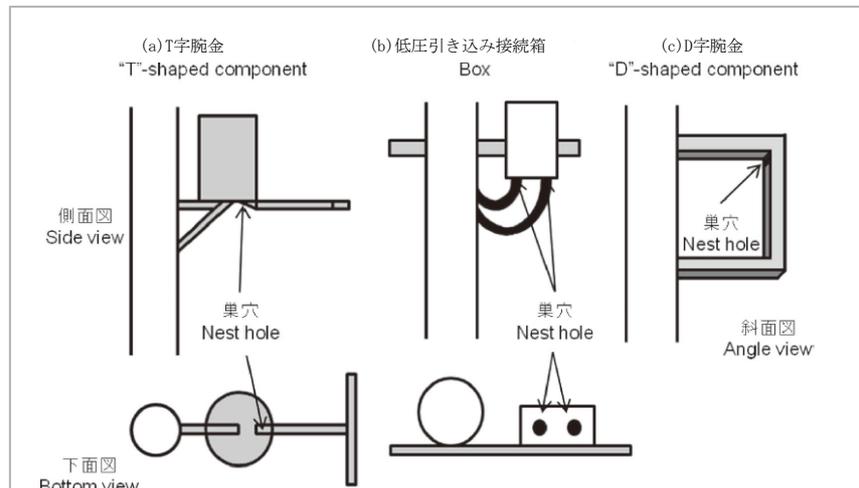
図1. スズメの個体数の経年変化 (鳥類標識調査における結果)
三上・森本 (2011) 標識データに見られるスズメの減少. 山階鳥学誌. 43:23-31より



電柱の角材の中で繁殖するスズメ



配電用の箱(低圧引込接続箱)中で繁殖するスズメ



電柱の構造物とスズメの営巣場所

加藤ほか (2013) 都市部と農村部におけるスズメの営巣環境、繁殖時期および空間配置の比較. 山階鳥学誌. 62(1):16-23より

電柱鳥類学

—電柱・電線を介した都市における人と鳥との共生関係の実態解明—

提供：科研費「電柱鳥類学」

電柱の構造物の説明

身近な存在である電柱ですが、皆さん、電柱のことについては「実はよく知らない」という人がほとんどだと思います。右の図に、電柱の構造を紹介しました。

外に出て本物の電柱を見てみよう

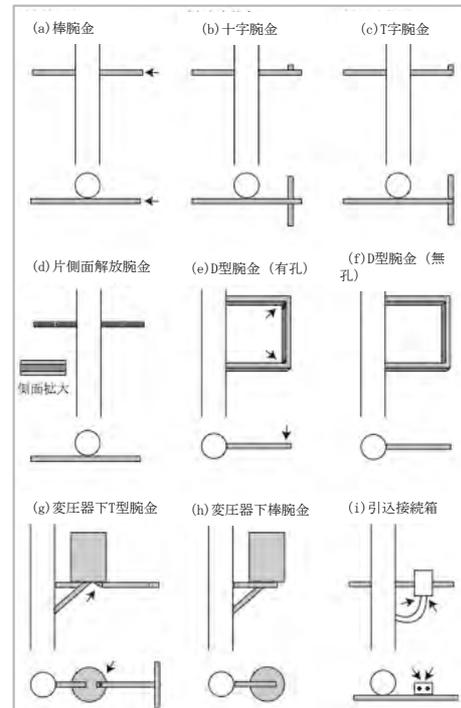
鳥の博物館ベランダから、外の電柱を近くで見ることができます。ぜひ、電柱を観察してみてください。

電柱を利用する鳥と利用方法

スズメ、カラス類、ムクドリ、ハクセキレイ、ツバメ、キジバト、ヒヨドリといった身近な都市鳥達は、電線を足場として利用しています。一時的に止まるものや、ねぐらとして利用するケース、ねぐら入り前の集合場所として利用するケース、地面の餌を獲る為の止まり木としてなど、利用方法はさまざまです。

スズメ以外の鳥による営巣

電柱はカラス類、カササギ、トビといった鳥達の営巣場所としても利用されています。とくにカラスによる営巣は、停電を引き起こす原因になるなど、問題も引き起こしています。都市鳥と人々の共存をどのようにはかるかは今後の課題です。

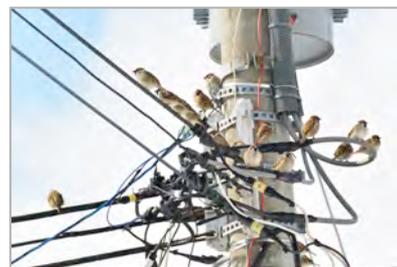


電柱上の構造物の模式図（側面図と底面図）

三上ほか（2014）スズメによる電柱への営巣：地域および環境間の比較。山階鳥学誌。63(1):3-13より



ねぐら入り前に電線で群れるムクドリ



電線で群れるスズメ



電柱につくられたカラスの巣

もぐり込めるスキ間が少ない西洋風の住宅の多い市街地では、電柱も大切な営巣場所なんだ。



ハクセキレイと足指欠損

提供: 森本元(山階鳥類研究所)

ハクセキレイは、都市に生息する鳥を代表する1種です。実は比較的最近になって都市に進出してきていることがわかっています。1960-70年代頃までは、主に冬鳥であるとともに、都市の中では見かけず沿岸部などに多かった種ですが、今では一年中、身近に見ることが出来る留鳥です。ただし、冬になると多数の個体が北方

から、越冬の為に渡来しており、夏よりも冬に個体数が多いのです。そして、ハクセキレイは水辺が好きな鳥です。河川や湖・海岸だけでなく、道路の側溝と行った小規模の水域も利用します。



公園の水辺のデッキ上で餌を食べるハクセキレイ

ハクセキレイの足の異常

実は、ハクセキレイでは足の異常がたくさん起きています。足の指がちぎれたり、その後の化膿の影響なのか足の形が変形してしまうのです。この足の異常は病気ではなく、怪我による結果である可能性があります。



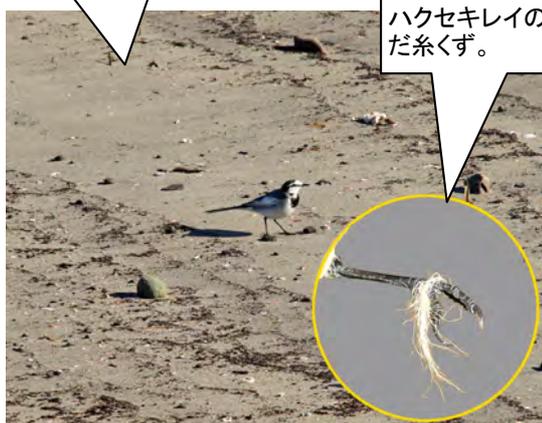
ハクセキレイの足の異常

右足は全ての指を失っています。左足は一部の指は残っていますが、変形しています。左足の金属製リングは環境省鳥類標識調査の個体番号です。この調査中に、足の怪我が発見されています。

ハクセキレイにおけるゴミによる被害

ハクセキレイは水辺に生息する鳥です。餌を水際で食べる傾向があります。そして、ハクセキレイが好んで利用するこうした環境は、餌だけでなくゴミが打ち寄せられたりして様々な漂流物が集まってくる場所です。そして、実際、ハクセキレイでは足にゴミがからんでいるケースが見つかっています。足指の欠損の原因は、ハクセキレイが利用する場所に存在する人間の出したゴミによる被害の可能性が考えられ、現在、調査・研究が進められています。

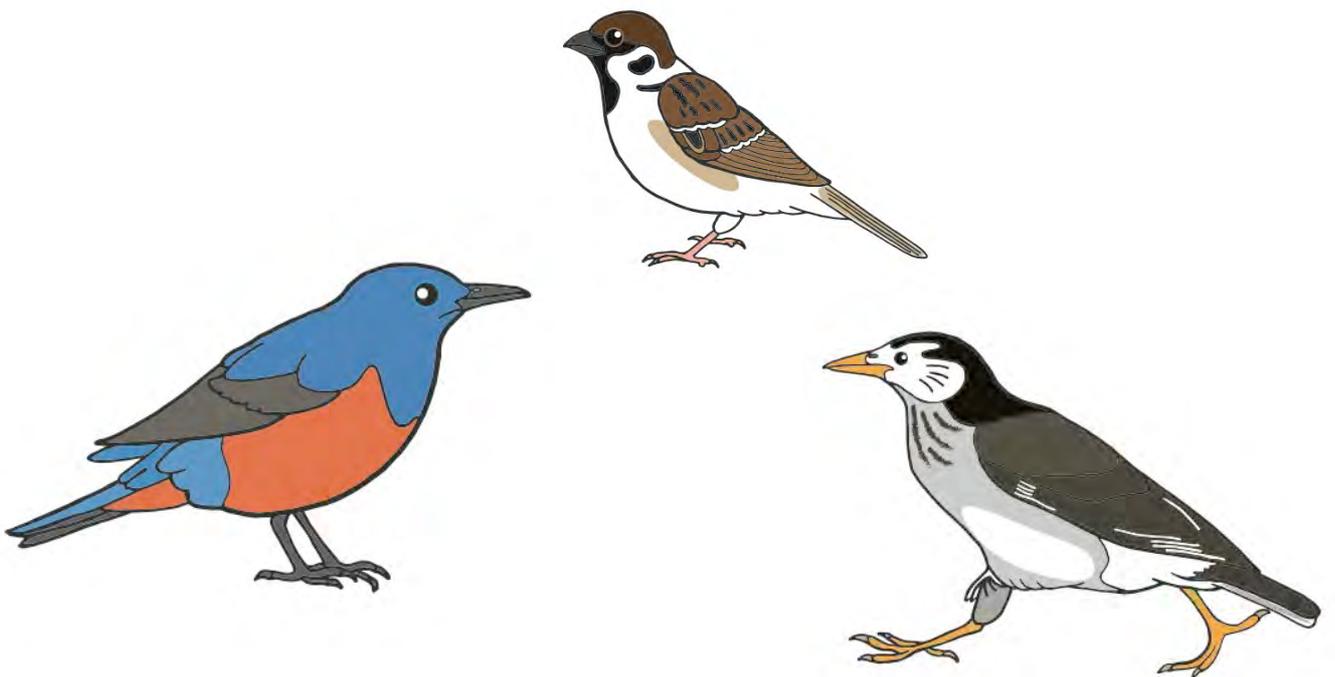
ハクセキレイが歩き回る場所には、多数のゴミがちらばっています。



ハクセキレイの足にからんだ糸くず。

水辺の砂浜で餌を探すハクセキレイ

6. 都市鳥トピックス



我孫子市鳥の博物館友の会の ツバメの巣調査

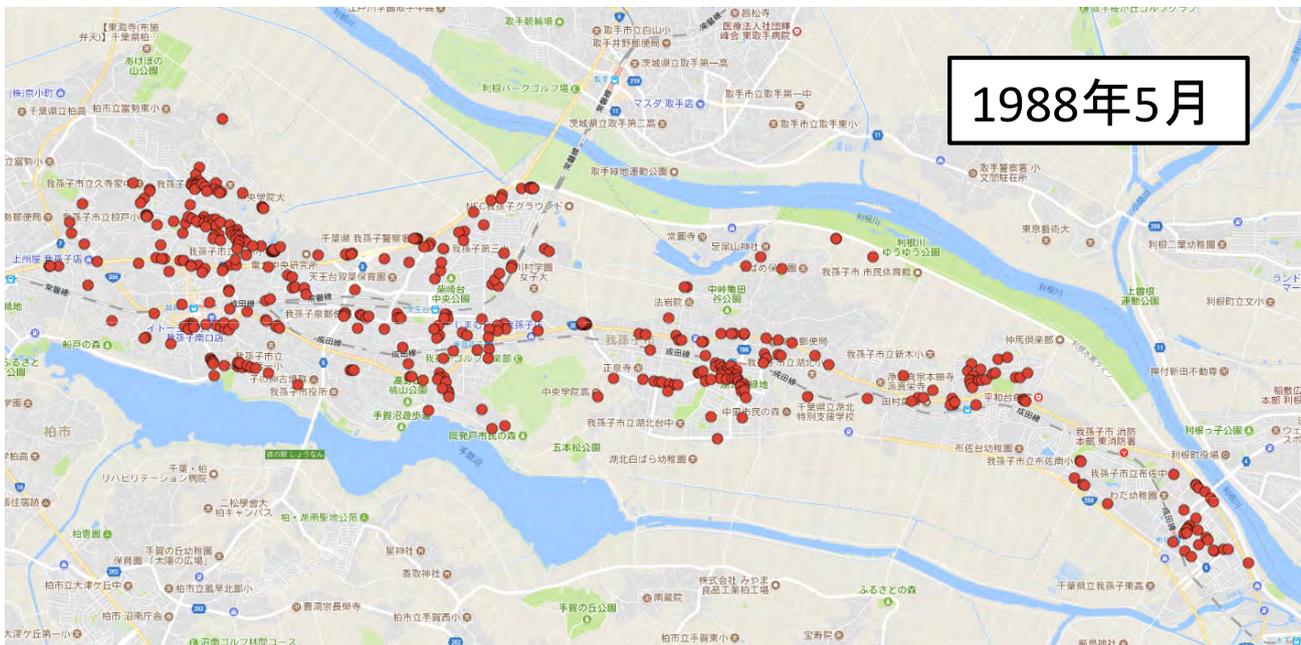
我孫子市では、1988年に市内のツバメの巣の数を調べる調査が行われ、我孫子市内で市民900名が参加しました。このときには市内で437個の巣が見つかりましたが、そのころと比べて、我孫子のツバメの数は減っているのでしょうか？

我孫子市鳥の博物館友の会では、2016年から友の会の会員に呼び掛けて1988年の調査と同じ方法で巣を数え、2017年と2018年には我孫子市内全域で調査を行いました。その結果、2017年には316個の巣、2018年には319個の巣が見つかりました。

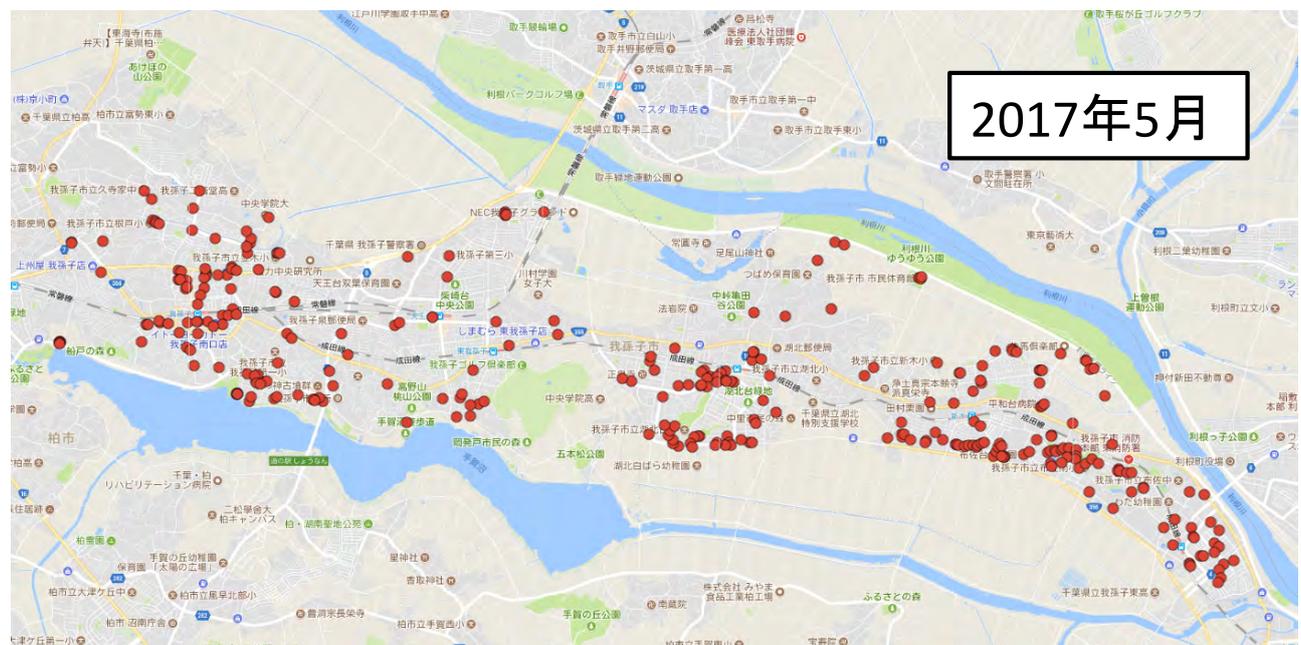
およそ30年で、我孫子市内のツバメの巣は3割ほど減っていました。巣の数が大きく減ったのは国道沿いや団地の商店街です。これらの地域では商店街に人が少なくなり、ツバメにとってはカラスなどの捕食者から逃れられる効果が小さくなったと思われます。また、都市化に伴って、巣を作るための泥や、餌の昆虫が得られにくくなったことも原因かもしれません。一方で、かつて林や畑だったところが宅地化された湖北台や新木では、水田に近い地域に家が立ち並んだことで、昔に比べて数が増えたことが分かりました。

人とともに生きるツバメの数を調査することで、私たちのくらす我孫子市の環境の変化を知ることができるのです。

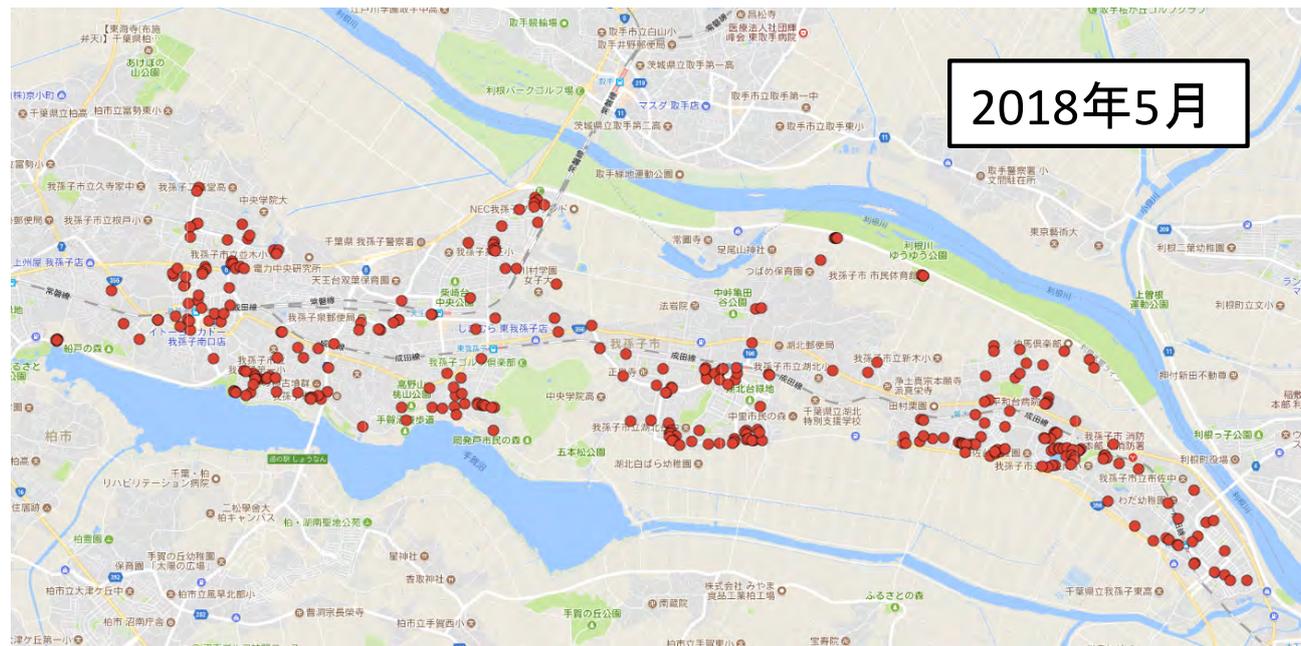
1988年5月



2017年5月



2018年5月



ツバメの子育てを見守ろう

春になると姿を現し、全国の人家の軒先に巣を造るツバメは、私たちに最も親しみのある身近な鳥の一つです。

しかし、環境省が行ったツバメの繁殖分布調査や大阪府市民環境会議が行った調査、石川県県民運動推進本部が主催した小学生による「ふるさとのツバメ総調査」などツバメの巣の年変化を追跡した調査では、いずれもツバメが減少しているという結果が出ています。

その原因として、里山の自然や農耕地の減少による餌となる昆虫の減少、西洋風家屋の増加による営巣場所の減少、などが考えられています。西洋風家屋に見られる軒の無い家や、汚の落ちやすい表面加工された壁面に巣を造ることは困難なのです。

さらに、最近では、ツバメの巣の下に糞や餌の昆虫が落ちて汚れるということで、巣を落としたり、巣を造れないようにする建物も多く、ツバメへの人の寛容さが失われる傾向もあります。

また、鳥インフルエンザの流行により、感染の可能性がきわめて低いツバメに対しても心配する人がいます。

ツバメにとって受難の時代ですが、ツバメが国内から姿を消してしまわないように、共存できる工夫が必要です。



フン受けを取り付けたツバメの巣

(写真は、NPO法人バードリサーチ提供)

※次のQRコードから、ツバメのフン受け設計図とツバメと一緒に街づくりのパンフレットが見られます。



←段ボールで作れるツバメのフン受け設計図



←ツバメと一緒に街づくり(NPO法人バードリサーチ)

市街地でくらすフクロウの餌事情

フクロウは夜行性のため観察する機会は少ない鳥ですが、市街地でも社寺林や大きな木がある林で見られる身近な猛禽類です。

鳥の博物館が我孫子市内の林につけた巣箱では、ほぼ毎年、フクロウが子育てしています。観察していると様々な餌動物が運ばれています。



ハタネズミ



クマネズミ



ドブネズミ



アズマモグラ



アブラコウモリ



トビズムカデ



ニホンヤモリ



ツバメ



スズメ

フクロウの主な餌動物は小型のネズミですが、生息する環境によって変化します。森林ではネズミ類が多く、市街地になると鳥類が増える傾向にあります。我孫子のフクロウを調べてみると、最も巣箱に運んだ回数が多かったのはニホンヤモリでした。

ニホンヤモリは夜行性で人家の灯りに集まる昆虫などを食べることから、フクロウが自然環境だけでなく、建物や電柱といった人工物の近くで狩りをしていることが考えられます。哺乳類は森林や農耕地で見られる小型のネズミの他に、クマネズミやドブネズミのような人家周辺に生息するものが運ばれていました。鳥類はスズメ、ツバメ、ドバトなど身近なものも多く、これらの鳥は昼間に活動することから寝込みを襲われているようです。

我孫子のフクロウは、餌動物をみる限りでは都会派といえるかもしれません。

我孫子のムクドリ–共存への努力–

2001年以降毎年夏になると、我孫子市のJR常磐線天王台駅前の街路樹にムクドリの埒（ねぐら）が形成されるようになりました。埒に集まるムクドリの数は年々増加し、2011年には隣の駅の我孫子駅前の街路樹にも集まるようになりました。夏の埒が形成される6月中旬から10月中旬までの間、ムクドリのフンや抜け落ちた羽毛、鳴き声による騒音などに悩まされる市民もいるため、我孫子市ではムクドリとの共存を前提にさまざまな対応をしてきました。

我孫子市では、人の健康や生活に支障のある場所から限定的にムクドリを追い出し、許容できる場所ではムクドリを受け入れるという基本方針で共存を図っています。

我孫子市のムクドリ対応の経緯

- 2001年** 天王台駅の街路樹にムクドリの夏埒が形成され、糞害と騒音の苦情が寄せられる。鳴子と街路樹ゆすりでの追い出しを行うが効果なし。以降毎年定期的に汚れた路面の清掃を行う。
- 2002年** 競技用スターターを使っでの追い出しを行うが効果なし。
- 2003年** ディストレスコールを使い追い出しを行うが効果が少ない。
- 2005年** 埒となる樹木へのネット掛けで一定の効果が見られたため、以降毎年実施。
- 2007年** 電線の鳥よけ装置を設置（東京電力）。埒に集まるムクドリの個体数調査を開始（～2015年）。
- 2011年** 我孫子駅前の街路樹に新たにムクドリの夏埒が形成される。
- 2015年** 猛禽（モモアカノスリ）を使い鷹匠による限定的な追い払い開始。夏埒が形成される初期段階に実施することで効果がみられた。糞害や騒音に関する相談が減る。



ねぐら入りの前に、
ねぐら近くの電線に
一旦、集まります。

駅前のロータリーに植
えられたケヤキの木に
好んでねぐら入りをし
ます。





商店の店先の
街路樹
(ケヤキ)
にムクドリ
飛来防止用
のネットを
取り付けた
様子。

猛禽類のモモアカノスリを使って、
食料品店の近くにねぐらをとったム
クドリを限定的に追い出します。



ムクドリの糞や羽毛
でよごれた路面を早
朝通勤ラッシュ前に
清掃します。



協力者・団体（敬称略）

企画展開催にあたっては、次の方たちに協力していただきました。

浅間 茂

石井 泉

井田俊明

NPO法人バードリサーチ

小笠原征紀

科研費「電柱鳥類学」

神山和夫

越川重治

鳥の博物館友の会

平岡 考

三上かつら

森本 元